

しよくぶつがく → [写真項目]

しよくぶつきこう 植物気候 植物が集団をなして植生を形成しているとき、その植生によって特徴づけられる地表付近の気候。樹林や草原など密生した植生では、太陽放射量が植生の表面でさえぎられるので、植生の地表付近では一般に昼間は外気より温度が低い。逆に夜間には地面からの放射熱が植生内にとどめられるので、一般に温度が高い。これに対して植生がまばらな荒野などでは、昼間の気温が外気より高くなることもある。

しよくぶつきよく 植物極 多くの動物の卵では、卵黄が卵の一方にかたよっており、そのかたよっている極を植物極という。反対側には細胞質がかたよることになり、その極を動物極という。

しよくぶつくけい 植物区系 地球上を同じような植物相をもつ地域ごとに区画したもの。北半球の温帯以北をふくむ全北区、旧大陸の熱帯、亜熱帯と南太平洋諸島にまたがる旧熱帯区、中央アメリカと南アメリカをふくむ新熱帯区、オーストラリアとタスマニアをふくむオーストラリア区、アフリカ南端のケープ区、南極大陸とその周辺の南極区の6植物区系界に大別する。

しよくぶつけいたいがく 植物形態学 植物の外形や内部構造を研究する植物学の一分野。植物の外形を研究する植物器官学と、内部構造を解明する植物解剖学との2

分科があり、さらに植物解剖学は細胞学と組織学に区別される。形態や構造の研究により、植物の発生、生殖、生活史などが明らかにされている。

しよくぶつけんえき 植物検疫 国外から持ちこまれる植物に病原菌や有害な昆虫、ダニなどが付着していないかを検査し、それらの侵入を防除すること。一般に港や空港に特別の検疫所を設置し、植物の生体はすべてここで検査をうけなければ輸入することができない。昆虫や病原菌が新しい土地にすみつくと、それらの生育に適した気候条件や天敵のいない環境によって異常に繁殖し、在来の植物に大害を与えることがある。日本に侵入したアメリカシロヒトリやジャガイモウグサレ病菌はその好例で、これらの被害を未然に防ぐ目的で検疫がおこなわれ、不合格のものはきびしい処分がなされる。

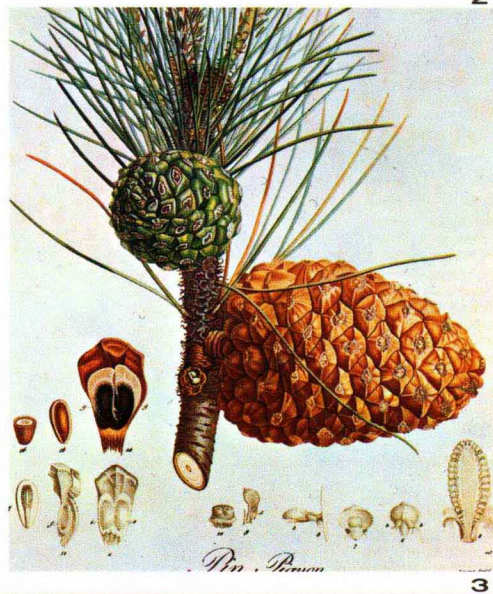
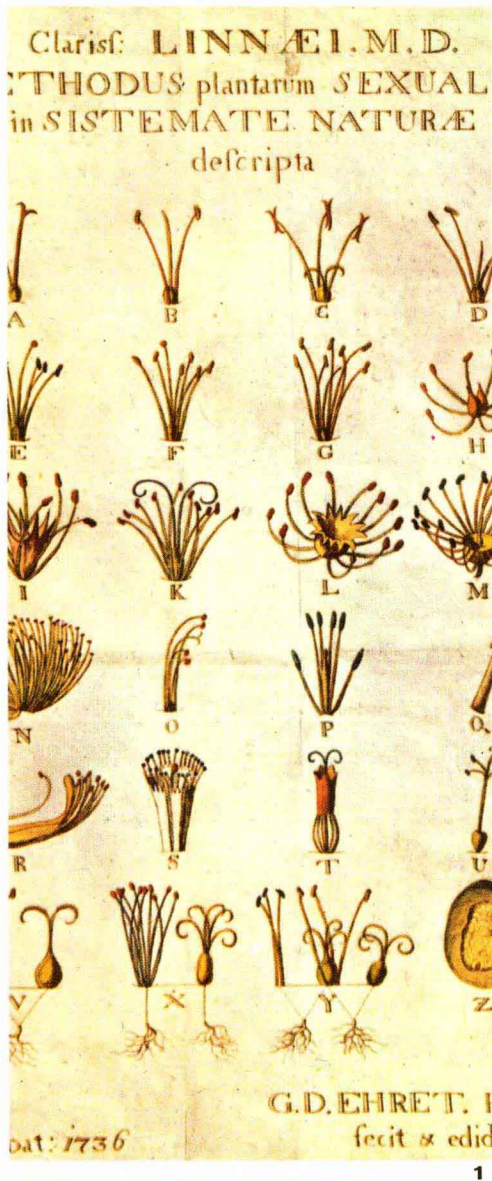
しよくぶつしきそ 植物色素 植物体にふくまれる色素の総称。フラボノイド、カロチノイド、クロロフィル(葉緑素)などがある。もっともひろく分布する色素はフラボノイドで、高等植物ではほとんどあらゆる部分にみられ、茎、葉、花、果実、根、樹皮などにさまざまな色を与えている。このなかのフラボノ類は黄色または橙黄色の色素で、黄色のダリアやレンギョウの花にみられ、古くから染料に利用したものが多い。アントシアン類は花青素とも呼ばれ、赤、青、紫の花色や紅葉の色を与えている。代表的なものにベニバナの紅色素のカーサミンがあり、絹を染める高級染料となる。このほか褐色染料、

皮なめしに用いるタンニン類も、広義にはフラボノイドにふくめることがある。カロチノイドは、黄色、橙色、紅色の色素で高等植物の花や果実のほか、褐藻植物に多くふくまれる。クロロフィルは緑色植物に典型的な色素で、光合成に重要な関係をもっている。このほか、黄色、橙赤色のキノン類がある。

しよくぶつしゃかいがく 植物社会学 植物の群落や社会について研究する植物生態学の一分科。主要な研究対象は群落がつくりだす環境と、植物個体あるいは群落全体との相互関係を考察することで、この点から群落生態学と同義に扱われることが多い。

しよくぶつせいしよくひん 植物性食品 食物をその材料で分類したときの一群体で、植物体の一部あるいは全部を利用するもの。高等植物では、葉や茎を利用する葉菜類、根や地下茎を利用する根菜類や芋類、果実や種子を利用する穀類、豆類、果実類、果菜類などがあり、下等植物では海藻類やキノコ類が代表的なものである。これらはおもに簡単な加工処理で料理に用いられるが、穀粉、澱粉、砂糖、植物性油脂、酒類、コーヒー、ココア、茶などの加工品も植物性食品にふくまれる。

しよくぶつせいたいがく 植物生態学 植物の生育とその環境との相互関係を研究する植物学の一分野。植物個体を対象とする植物個体生態学、群落を対象とする群落生態学、地理的にみた群落の分布、あるいは地理的な環



しよくぶつがく 植物学 植物を研究対象とする生物学の一分野。古代のギリシア・ローマ時代には、アリストテレスを代表とする生物学がめばえていたが、近代的な意味での植物学は、ルネサンス時代にさかんになった本草学による薬用植物の分類から発達した。写真②④は1532年にジェラルド・チボがつくった世界最古の植物標本集(ローマ、アンジェリカ図書館蔵)。18世紀のスウェーデンの博物学者リンネはこの分類学を進展させ、分類体系の基礎を築いた。写真①はリンネ著「自然の体系」(17

35)。初期の植物学は、ほとんど分類学であったが、やがて形態学や生理学が発達した。写真⑤は1853年刊行の形態学書「果樹」(ロンドン、大英博物館蔵)。いっぽう、16世紀末に顕微鏡が発明されると、植物の微細構造が研究されはじめ、1665年のイギリスのフックによる細胞の発見、1838年のドイツのシュライデンによる「細胞説」など、細胞学の基礎が確立した。19世紀には、1859年にイギリスのダーウィンによって「種の起原」が出版され、進化論の発展をうながしたが、65年に発表された「メ

ンデルの法則」は、メンデルの死後、1900年になってオランダのド・フリースらによって再発見され、遺伝学の基礎となった。20世紀にはいると、植物と環境との関連を研究する生態学がさかんになり、実用的な応用植物学がひろく研究されはじめた。現在の植物学には、分類学、形態学、生理学、細胞学、進化論、遺伝学、生態学のほか、組織学、発生学、生化学、地理学、系統学、古生植物学などの分科があり、農学、薬学、医学など応用科学の発展におおいに寄与している。とくに農学は植物学と

しょくふつ

環境条件と分布との関係を研究する植物生態地理学などの分科がある。栽培植物の環境条件や群落内の物質収支を研究する場合には、農学、林学との関係が深い。

しょくぶつせいひりょう 植物性肥料 おもに植物を原料とする肥料。植物質肥料ともいう。野草、農作物の廃棄物などを1か所に集めて腐食させた積み肥、肥料作物や野草をなまて用いる緑肥のほか、植物油かす、草木灰などがある。積み肥と緑肥は速効的な効果は期待できないが、養分を土壌に還元し、地力を維持する働きがある。油かすは窒素、草木灰はカリ肥料として用いられる。

しょくぶつせいらがく 植物生理学 植物の活動や機能を研究する植物学の一分野。植物の物理的、化学的現象を対象とする学問で、光合成や代謝の仕組み、生長ホルモンの働きなど生化学、生物物理学との関連が深い。ベニシリンなど植物が産生する抗生物質の発見も、植物生理学者の業績である。

しょくぶつそう → **[写真項目]** 次ページ。

しょくぶつたい 植物帯 植物の分布を垂直的な方向によって区分したもの。ヨーロッパの低地から高山にかけて、とくに樹木の分布にもとづく資料から説明されたので、草原や砂漠などには該当しないことが多い。低地から丘陵帯、低山帯、亜高山帯、高山帯に分けられ、樹種によりシイ・タブ帯、ブナ帯、タンネ帯(シラビソ帯)、

ハイマツ帯などと呼ばれる。

しょくぶつちりがく 植物地理学 地球上の植物の分布を研究する植物学の一分野。19世紀初頭、ドイツのフンボルトが世界各地を探検調査し、植物の景観と気候とが深い関係をもつことを明らかにし、先駆的業績を残した。一般にシダ植物以上の高等植物の分布を研究対象とし、植物相から区分する方法、生態的要素を重視する方法、進化や分布圏の移動を考察する方法がある。

しょくぶつどく 植物毒 植物体にふくまれる有毒成分の総称。古代からきわめて多くの種類が知られており、狩猟、儀式、呪術(じゅじゅつ)、戦争、殺人、流産、刑罰などに用いた。現代では殺虫剤、殺鼠(さつそ)剤をはじめとする医薬品に多く用いる。代表的なものにマメ科のデリスから得られるロテノン、ジョチュウギクの成分ピレトリン、トリカブトの烏根(うこん)がある。

しょくぶつにんげん 植物人間 外傷や病気によって脳に障害をおこし、意識、知覚、運動などの諸機能が停止し、代謝活動をいともむ自律神経系の働きだけで生きつづける人間の通称。外部から栄養補給などの処置をほとんどしなければ生きつづけることができないが、医療補助によって10年以上生存した例もある。最近では交通事故の多発にともなって増加の傾向がめだつ。看護師や医師の立場から〈安楽死〉を求める問題が提起されており、アメリカ合衆国の〈カレン裁判〉は有名。

しょくぶつびょう 植物病 植物がかかる病気。古くから多くの関心が寄せられ、古代ギリシアでは〈植物学の父〉と呼ばれるテオフラストスが栽培植物の病気に関する多くの記述をおこなった。しかし、微生物を病因と考えるようになったのは比較的新しく、18世紀後半からである。おもな病原性微生物にはウイルス、細菌、菌類がある。ウイルスではタバコ、ジャガイモなどナス科植物に病気をおこすタバコモザイクウイルスが有名で、その研究は19世紀後半のオランダのメーヤーにはじまる。細菌によるものは、リンゴ、ナシなどの根頭癌腫病(クラウンゴール)、火傷病などがある。菌類によるものはきわめて多く、イネのいもち病、コムギの黒銹病、ジャガイモの疫病、クリの胴枯れ病など有名な植物病のほとんどかふくまれる。このほか、植物病の原因には寄生植物や線虫があり、外界の悪条件も無視できない。

しょくぶつびょうがく 植物病学 植物の病気について研究する植物学の一分野。病気の原因や流行状態、病気にかかった植物の形態や生理を研究する分科を植物病理学、病気予防や治療について研究する分科を防除学と区別するが、ひろく植物病理学と総称することもある。原因については微生物学、細菌学、昆虫学との関連が深く、病態については他の植物学の諸分科に関係し、防除学では薬学、化学などの知識も必要となる。植物の病気については古くから記載されていたが、植物の病因が微生物の感染によることを確かめ、植物病学の基礎を築いたのは、18世紀末のフランスのティレとブレボである。



不可分な関係にある学問で、作物学、栽培学、育種学、病理学、肥料学、土壌学、林学などの分科はいずれも植物学を基礎にしている。このなかで、栽培植物の遺伝形質を改良し、より生産性の高い品種をつくりだすこと、すなわち品種改良を目的とする学問が育種学である。育種は、人類が農作物を栽培しはじめたとき、ごくしげんに、よりよい作物を選択したことからはじまった。その後、一部の学者や篤農家のあいだで特別に進められたが、現在のような植物学、遺伝学、生化学、物理学、統

計学、その他の学問を応用した生物科学として確立したのは19世紀以後のことである。農作物の研究を進めることにより、農業生産をできるだけ高め、ある品種のすぐれた特性をさらに改良し、寄生動植物や、やせた土壌成分などのマイナス因子を除去することが可能になってきた。育種の方法には、優良品種の選抜や人工的な交配、あるいは、薬剤によってできた倍数体の利用などさまざまなものがある。アメリカ合衆国オハイオ州のバトルにある農業試験場では、太陽光線を最大限に通すように

つくられたプラスチックの試験管内で、おぼけジャガイモを実験的につくっている(写真⑥)。また、コネティカット州のニューヘブンにある農業試験場では、作物にあたる空気の流れのなかに生じる動力学的な渦流を観察して、作物の静電位を研究している(写真⑦)。このほか、追跡物質として放射性炭素を注射した、とうもろこしによる実験(写真⑧)や、アブラムシに金属の電極をとりつけて電気回路のなかに置き、その動きを研究する実験(写真⑨)などもおこなわれている。

19世紀後半には近代植物病理学の父といわれるドイツのキューンが「作物病害論」を著わし、フランスのミラルデはブドウのべと病に卓効を示すボルドー液を創作し、防除学の発展を導いた。今日では、栽培植物のきわめて多数の病気について詳細な研究がおこなわれている。

しよくぶつプランクトン 植物—— 水中で浮遊生活する微小な植物。藍藻類、珪藻類、鞭藻類、緑藻類などにふくまれる下等な藻類で、淡水には藍藻類、緑藻類が多く、海水では珪藻類が代表的。いずれもクロロフィル(葉緑素)をふくみ、光合成により独立栄養をいとなむ。水生生物の食物連鎖のもっとも基本的な生産者として重要な地位を占める。一般に表層近くに分布し、ときに異常繁殖して「赤潮」の一因となる。

しよくぶつホルモン 植物—— 植物の体内でしぜんに産生される有機化合物で、微量で植物体の生理的機能を支配するもの。生長ホルモンとしてはオーキシンが有名で、おもに茎の頂端部で産生されていることが知られている。ほかに、ブドウなどの種なし処理に用いられるジベレリンなどがある。

しよくぶつゆし 植物油脂 植物から得られる油脂の総称。大部分は種子植物の種子を原料とする。脂肪油としては、亜麻仁油、桐油、えごま油、大豆油、大麻油などの乾性油、ひまわり油、ごま油、綿実油、とうもろこし油などの半乾性油、オリーブ油、椿油、ひまし油、落花

生油などの不乾性油がある。常温で固体または半固体の脂肪には、やし油、カカオ脂、木ろうなどがある。植物油脂は食品、石鹸、潤滑油、塗料、医薬品、合成樹脂、印刷インキ、ろうそくなど広い用途がある。

しよくほう 食胞 原生動物が外部から食物を取り込んだとき、その周囲に一時的に形成される液胞。詳細な点是不明であるが、食胞周辺の細胞質から消化酵素が胞内に分泌され、食物の消化、吸収がおこなわれる。食物のかすが体外へ排出されると食胞は消滅する。

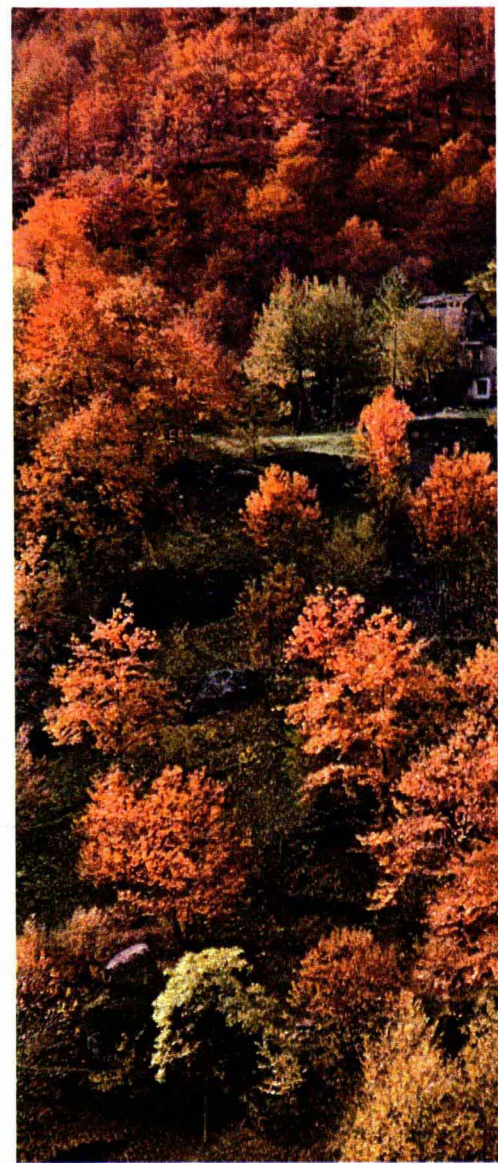
しよくみんし 植民市 植民によって形成された、母国から独立した自治体制をもつ古代の都市国家。ギリシア語でアポイキア(分離した家)という。植民市建設をもっともさかんにおこなったのは、前750～前550年の時代のギリシアであった。この期に、エーゲ海から地中海、北アフリカ沿岸、黒海沿岸一帯に建設された諸植民市は、ギリシア人の商取引の拠点となり、また、文化の発展にも大きな役割を果たしたが、当時の人口急増によって生じた土地獲得の運動が、植民市建設の直接的な動機と考えられている。なお、ローマの植民市コロニアは、自治体制をもたなかった点でアポイキアと異なり、とくに軍事上の目的から建設されたものが多い。

しよくみんち 植民地 国民の一部が本国から離れて一定地域に移住して開発することにより、領土として本国に従属することになった地域をいう。すなわち歴史的に

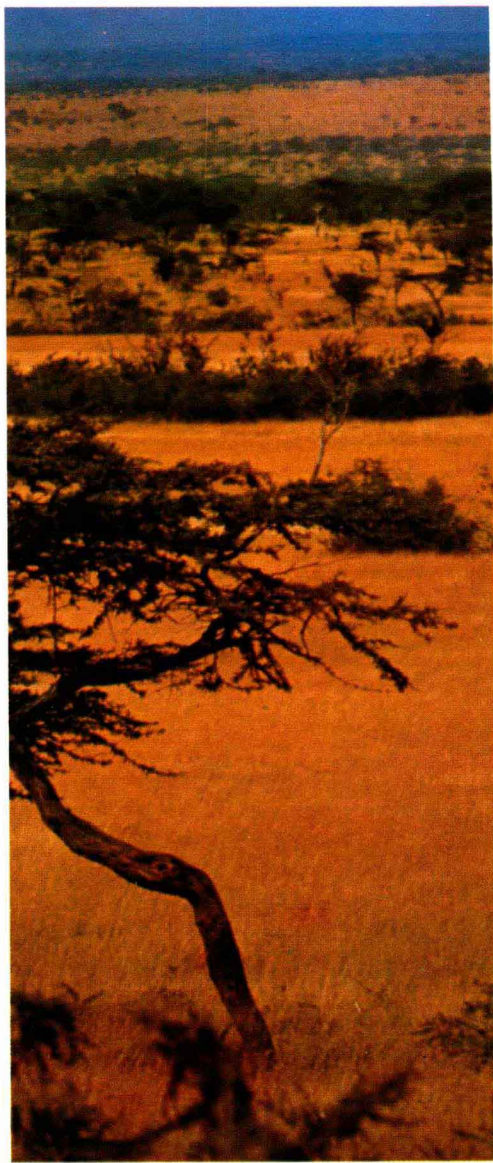
最初の植民活動は古代フェニキア人が地中海周辺でおこなったとされるが、当時は単なる海外移住にすぎず、今日称する植民地とは、近代以降ヨーロッパ列強によって海外に形成されたものをいう。15世紀末からポルトガル、スペインによって銀、たばこ、香料などの収奪のため、アジア、アメリカ大陸に植民地がつくられた。この時期には商業貿易の拠点として、また原住民の奴隷化など武力的植民地支配がおこなわれた。その後、オランダ、フランス、イギリスが進出し、とくに18世紀後期から、産業革命の影響によって新たに市場の確保という意味が加えられ、原料の獲得とあわせて苛酷な圧政がなされた。そして資本主義の発達にともない、19世紀の末には植民地再編成の動きがあらわれた。しかしこれとともに民族解放運動もおこり、自治領制などにより植民地体制の維持がはかられた。20世紀にはじめて2度の世界大戦を経たのち、多くの植民地が独立したが、今日なお残された地域では、解放のためのたたかいが進められている。

しよくみんちしゅぎ ⇨ コロニアリズム

しよくもうじゅつ 植毛術 火傷によって瘢痕を残し頭髪がぬげ落ちた場合や、癩(らい)病で眉毛が脱落した場合などに毛を移植すること。体毛の移植は、本人の他の部位からおこなう自家移植のみ可能である。その方法には、毛根と周辺の組織をふくめて抜いた毛髪を1本ずつ局部に植えこむものと、頭部から局部の形に皮膚ごと採取したものを植える方法とがある。



1



2



3

しよくぶつそう 植物相 ある限られた地域に生育する植物の種類(の総称)。フロラともいう。スウェーデンの植物学者リンネの提唱による用語で、ラップランドの植物に関する彼の報告書「ラップランドの植物相」(1737)で詳述された。混同されやすい語に「植生」があるが、これはある地域の植物の集合状況、または、その地域の代表的な植物によって特徴を表現するものである。植物相はその地域の全植物を固定し、それを一覧表に示したもので、たとえば、プレーリーという地域は密生した草原

であるから植生は豊かであるが、構成する種の数は少ないので植物相は貧弱である。一般に植物相は、気候や土壌などの環境因子の変化の影響をうけて、近接した地域では連続的に変化していく。しかし、海峡、砂漠、山脈など条件の悪い環境が存在すると、植物相が顕著に異なる場合がある。このような状態を「フロラの滝」と呼び、植物の地理的分布をきめる重要な境界線になる。とくに、海洋中の島などでは隔絶された環境の影響を強くうけ、特異的に発達した種が多く、学問的に大きな関心を

もたれている。植物相の分布状態を基準に世界を地域区分したのが植物区系で、全北区、旧熱帯区、新熱帯区、オーストラリア区、ケープ区、南極植物区の6つに大別される。全北区は、ユーラシア大陸と北アメリカ大陸の温帯以北をふくみ、共通する植物相は、球果植物、アブラナ科、ナデシコ科などが一般的である。旧熱帯区は、アフリカ大陸の大部分、熱帯アジア、南太平洋諸島をふくみ、タコノキ科、フタバガキ科、ウツボカスラ科などを特産する。新熱帯区は、バタゴニアを除いたメキシ

しょくもつ

しょくもつ → [写真項目] 次ページ。

しょくもつれんさ 食物連鎖 ひとつの生物群集内の各生物種に、食う食われるの関係があることをいう。プランクトンをイワシが食べ、イワシをブリが、ブリを人が食べるという関係では、プランクトン→イワシ→ブリ→人という食物連鎖があるという。食物連鎖には、捕食連鎖、寄生連鎖、腐生連鎖などが考えられ、捕食連鎖では上位の捕食者へ近づくにつれて個体は大形になり、個体数は減少するのがつうである。また、各食物連鎖はまとめられて食物環としてあらわされ、生態系での物質循環を示す。食物環を大別すると、生産者の緑色植物、消費者として直接、間接に植物を食う動物、分解者として動植物の死体や排出物を利用する微生物の三者からなる。また、消費者では植食動物を1次消費者、つぎの小形肉食動物を2次消費者、以下3次、4次というようにに区別する。

しょくゆう 贖宥 カトリック教会が、個人の自発的贖罪に付加して定めた有限な罪の免償制度。現在は「免償」の用語を使う。個人のおかした罪は、キリストの死による「あがない」の結果として、完全な悔悛、告解の秘跡によって許されるが、有限な罪のつくないは、まめがれることができない。しかし、キリストの贖罪の神秘体である教会が、特別に煉獄における罪のつくないの免除を与えることができ、その方法として定めたのが贖宥である。依頼者は、大罪がなく、善業苦業、忍耐、祈りなど

により成聖の条件を満たすことが必要とされ、代願によって、肉親など煉獄の靈魂のためにゆずることができる。贖宥には全贖宥(全面免償)、分贖宥(部分免償)があり、教皇と司教のみほどこすことができる。ルターの宗教改革は、贖宥制度批判に端を発したものである。

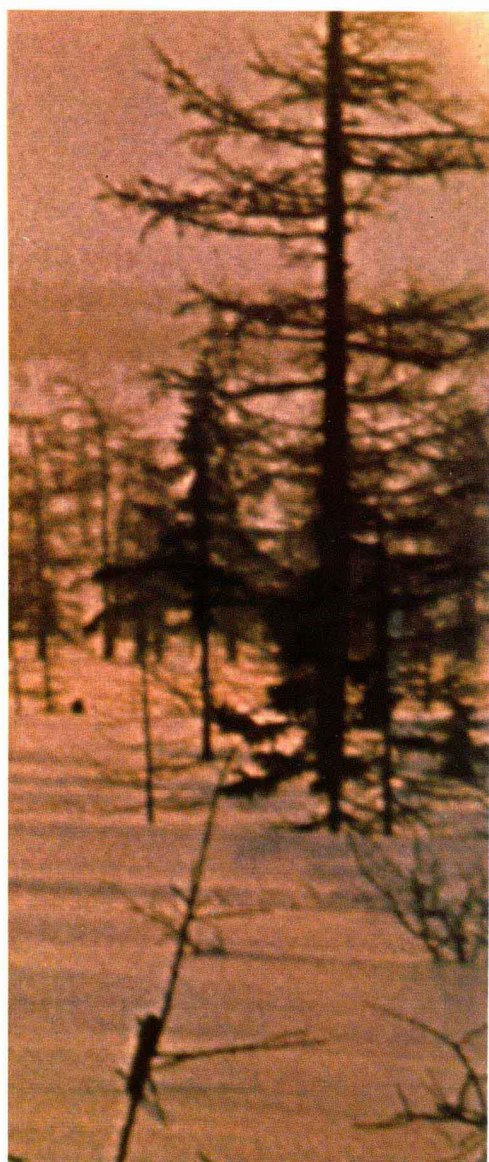
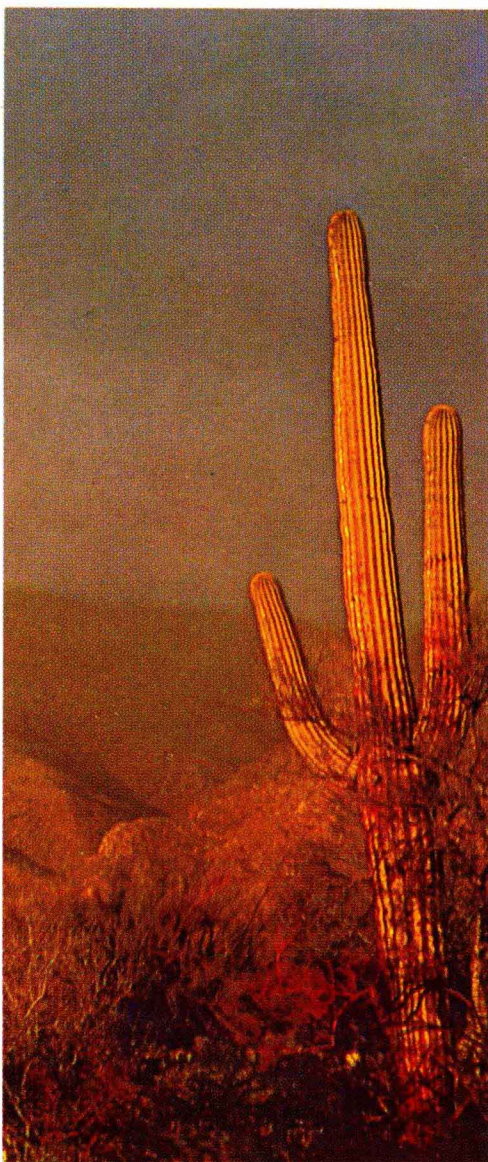
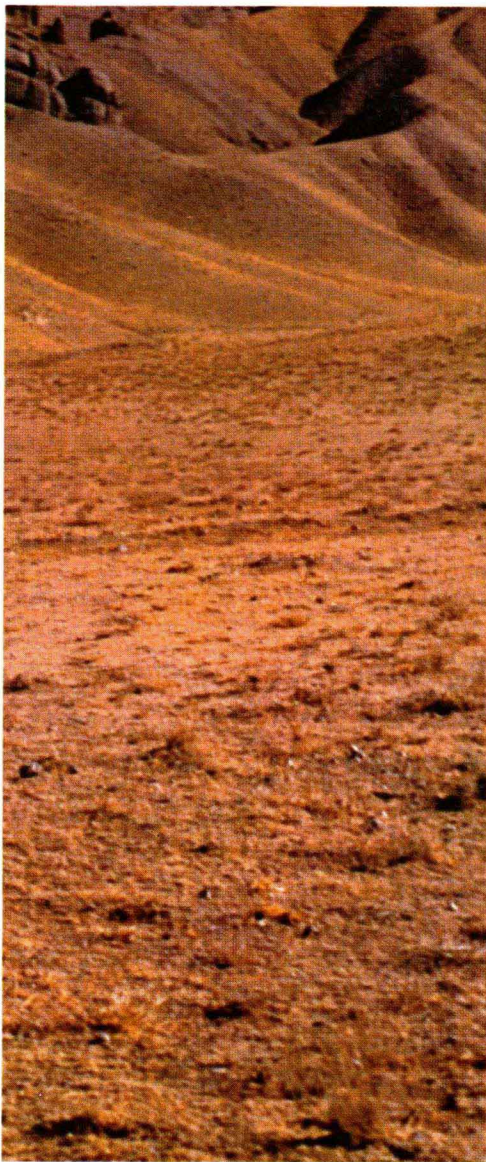
しょくよく 食欲 ある種の栄養の欠乏にともなって、特定の食物に対する欲求がおこること。また、個人に備わった嗜好によってもおこり、満腹時でも好きな食べ物に対して食欲を生じるので飢えとは区別して考える。カルシウムが欠乏している状態では、灰や壁などに対して食欲が生じることがあり、器質的疾患により塩分が不足した場合などは、塩を強く好むようになる。こうして生体内の状態は、栄養学で示される要求量をおおむね保つようにできている。食欲異常といわれるものは、偏食や嫌忌をもよおすような条件で食欲不振におちいたり、呪術的な要因からカニバリズムなどのかたちをとったりすることがある。

しょくりょうかんりほう 食糧管理法 食糧の需給、価格に対する国家管理を定めた法律。国民の食糧を確保し、経済活動の安定をはかることを目的として各国でおこなわれている国家の食糧統制で、食糧の生産、流通、消費、価格を対象としている。日本では1942(昭和17)年制定の食糧管理法があり、第2次世界大戦中および戦後の食糧管理がこれにもとづいてきびしくおこなわれたが、現在直接統制がおこなわれているのは米だけである。

じまけん 徐謙 1871～1940 中国の政治家。安徽省の出身で、清朝時代から法部参事など、司法関係の職にあった。1917年に広東軍政府で孫文の秘書長となり、翌年司法部長を兼任する。ソビエト連邦に接近した政治路線を歩み、馮(ひょう)玉祥とソ連邦を訪問、27年には漢口、九江のイギリス租界を回復したが、国共分裂後に失脚し、34年の福建革命にも失敗した。

じょこうけい 徐光啓 1562～1633 中国、明朝末の科学者、政治家。字は子先、上海の人。1600年、イエズス会最初の中国宣教師マテオ＝リッチを知り、3年に洗礼をうけてキリスト教徒となる。翌年、進士に及第して翰林院庶吉士になるとともに、リッチから数学、天文学、水利などの西洋科学を学び、6年にはユークリッド幾何学を漢訳して「幾何原本」(6巻)を刊行した。また、生地に天主堂を建立するなど、キリスト教布教にも尽力し、官人としても内政の改善につとめた。一時、退官して農学の研究に専念し、「農政全書」60巻を著わしたが、再度仕官して、戦術や暦をヨーロッパ式に改めた。

じょこうさい 除酵祭 ユダヤ教の祭りのひとつ。「旧約聖書・出エジプト記」に「種入れぬパンの祭り」と記されているもので、過越(すぎこし)の祭りの翌日、ニサン月の15日から1週間、種入れぬパンを食べる慣習があった。これは、イスラエル民族がエジプトを脱出するとき、種なしでパンをつくったことに由来するが、古くからの農耕の祭儀に淵源を発している。



コ以南のアメリカ大陸で、サボテン科、イワタバコ科、カンナ科などを原産する。オーストラリア区は、オーストラリア大陸とタスマニアをふくみ、ヤマモガシ科のハゴロモノキ属、フトモモ科のユーカリ属が代表的である。ケープ区は、南アフリカのケープ地域だけという小地域であるが、ザクロソウ科のマツバギク属などに特異な分化をした種が多い。南極植物区は、南アメリカ南端のパタゴニア、南極大陸およびその周辺の島々からなり、きびしい環境下で種数は少ないが、セリ科のアズレ

ラ属など特異なものを分布している。このような植物区系とは別に、赤道を中心とした植物の水平分布にも、植物相の区分をみることができる。その典型的なものは外見上の景観として植物区系以上に明確である。たとえば、熱帯雨林(写真③)は、広大な範囲を占める常緑広葉樹林帯で、複雑な植物相をもっている。サバンナ(写真②)は、熱帯雨林の外側に発達して、顕著な乾季があるので、大草原を形成し、植物相はあまり豊かでない。砂漠(写真④)は、さらに特異な植物相を示し、アフリカではイ

ネ科の1年草、北アメリカではサボテン類が代表種である。ステップ(写真⑤)は中緯度地方にみられる乾燥草原で、イネ科植物が中心となる。冬季に冷涼となり、樹木がみられないことなどでサバンナと区別される。落葉樹林(写真①)は、温帯以北の湿潤な地域に発達し、複雑な植物相の混成林を形成する。タイガ(写真⑥)は、北半球の北部に発達する針葉樹林帯で、落葉樹林と異なり、構成種は少ない。さらに極点に近づくと、地衣類、コケを主体としたツンドラがあらわれる。

ジョコンド **Fra Giovanni Giocondo 1433? ~ 1515** イタリアの建築家、古典学者。ペロナに生まれ、ローマで古代建築を学ぶ。1499年、シャルル8世に招かれてフランスに渡り、プロワの城の一部を制作したほか、ノートル＝ダム橋を建設。1505年に帰国して翌年からベネツィアで架橋、運河建設などに従事し、14年には、ローマのサン＝ピエトロ聖堂改築の設計主任に任命された。また、ウィトルウィウス、カエサルなどの研究者としても知られる。

じょさい 助祭 カトリック教会で司祭につぐ位階、役職の名称。祭式において司祭の聖務を援助し、また、信徒への説教、教会財産などの管理もおこなう。

じょさんじゅつ 助産術 既知の判断から未知の判断を導きだすために、ソクラテスが用いた問答法の形態をとる教授法。帰納法によって相手の矛盾を暴露しつつ、対話の過程でおのずから普遍的概念に到達させる。

ジョージ Henry George 1839~97 アメリカ合衆国の経済学者。急進自由主義的な土地制度改革論者で、イギリスに渡り土地改革運動の指導者として活躍し、19世紀末イギリス社会主義運動の復活に大きな刺激を与えた。リカードの地代理論に立ち、地代を租税とし、他のすべての租税を廃止せよとの単一課税論を主張した。また、土地社会主義者とも呼ばれた。主著「進歩と貧困」(1879)は各国でベスト＝セラーになった。

ジョージア Georgia アメリカ合衆国南東部の州。面積15万2489平方キロ、人口449万2000(1970)。州都アトランタ。アパラチア山脈の南端からピーモント準平原を横切って大西洋岸の海岸平野にかけてひろがる。1732年に港湾都市サバンナに植民がはじまり、53年にイギリスの直轄支配下に移り、76年、アメリカ合衆国独立13州の1つとなる。平野部が州面積の6割にも達する。亜熱帯性気候で、高温多湿であり、ワタのほかタバコ、ナンキンマメ、果樹などを栽培している。林業や畜産もさかんて、とくにプロイラーは合衆国第1位である。花崗岩、大理石なども産出される。繊維工業を中心に製材、製紙、食品加工、機械工業などがおこなわれて、州都は南部5州の商業、交通の中心になっている。農家の貧困や黒人差別問題をかかえており、ミッチェルの小説「風と共に去りぬ」の舞台としても有名。

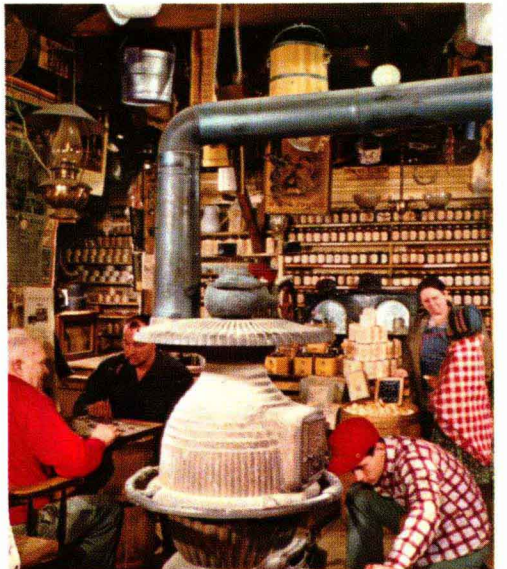
ジョージいっせい —— 1世 **George I 1660~1727** イギリス国王(在位1714~27)、ハノーバー選挙侯(在位1698~1727)。イギリス王ジェームズ1世の孫で、ドイツのハノーバー選挙侯に嫁いだソフィアの子。新教徒であったため、1701年の〈王位継承法〉にもとづき、アン女王の死後、むかえられて即位、ハノーバー朝を開いた。ハノーバー公家に執着が深く、英語を解せなかったこともあって、イギリスの国政はホイッグ党の大臣に一任し、結果的にイギリスの議会政治の発達をうながした。

しよしがく 書誌学 書物そのものを研究する学問。近

世ヨーロッパ語ではビブリオグラフィーといい、ギリシア語で〈書物〉を意味するビブリオンと、〈記述する〉を意味するグラフィインの2つを語源とする。ひろく印刷、造本、校合、異本など書物の物質的形態を研究し、あわせて、その起源、歴史、用途などを研究する学問分野で、狭義では、特定の主題について研究する文献学、書誌などと区別される。ヨーロッパでは、18世紀中ごろまで、ビブリオグラフィーの語は〈書物を書く〉意味に用いられたが、フランスのドビュールの「書誌教本」7巻(1763~68)以来、書物に関するすべての理論的研究をさすようになった。今日、もっともさかんな国はイギリスで、とくに19世紀末以来、大きな成果をあげている。

ジョージごせい —— 5世 **George V 1865~1936** イギリス国王(在位1910~36)。エドワード7世の次男で、兄の死により王位継承権を得た。海軍にはいり、海外植民地をよく訪れ、また国王としてひろく信望を集めた。

ジョージさんせい —— 3世 **George III 1738~1820** イギリス国王(在位1760~1820)、ハノーバー選挙侯(在位1760~1815)、ハノーバー王(在位1815~20)。ジョージ2世の孫。政党、とくにホイッグ党の力を弱めて、王権の回復をめざした。対外的にアメリカ独立革命、フランス革命、ナポレオン戦争に遭遇したが、トーリー党のノース、小ピットらを用いて難局をきりぬけた。1765年以降、しばしば精神病発作に襲われ、晩年は廃人同様となって、政務のいっさいを皇太子にゆだねた。

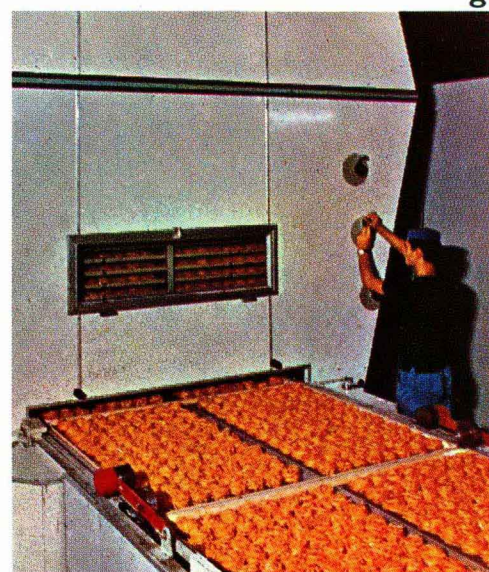
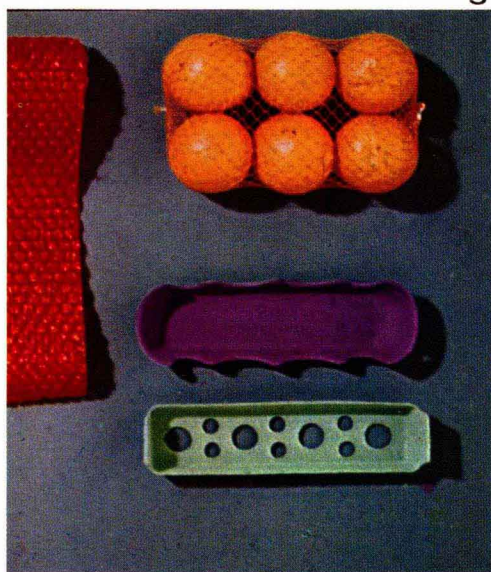
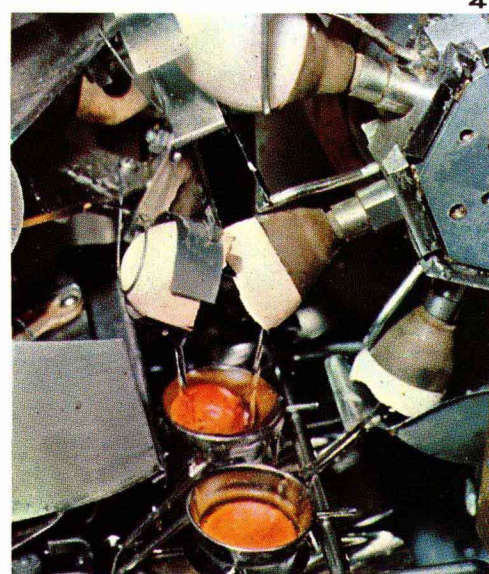
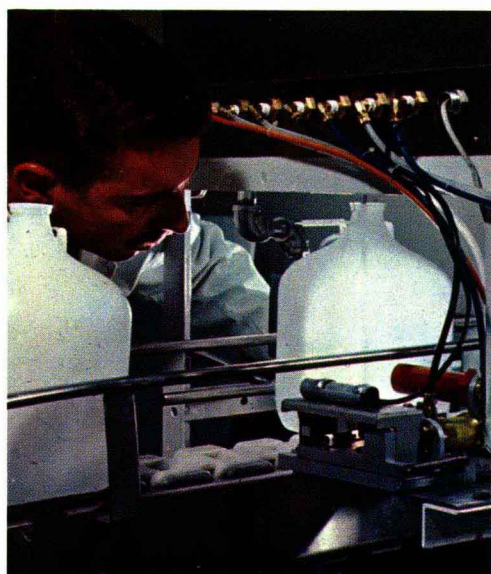


しよくもつ 食物 生物が日常的に摂取し、生理的な諸機能に役立つもの。一般的には、人間が食欲の対象とし、栄養素をふくむものをいい、食べもの、食品、食糧など同義的な言葉も多い。食物は材料上、動物性食品、植物性食品、鉱物性食品、化学合成食品などに区別され、食習慣上では、主食、副食、嗜好品、調味料などに分類される。写真●は各種の食品。食物にふくまれる栄養素には、炭水化物、脂肪、たんぱく質、無機質、ビタミンなどがあり、体内にとり入れられて人体の構成成分に

なったり、エネルギーの源泉になったりする。とくに、水とともに食物の主要成分を占める炭水化物、脂肪、たんぱく質は、三大栄養素として不可欠なものとされる。炭水化物は穀類を主とする植物性食品に多くふくまれ、もっとも簡単にエネルギーに転換される。脂肪は動物性食品や植物の種子などに多くふくまれ、単位あたりに発生するエネルギー量はもっとも大きい。たんぱく質は動物性食品や豆類などに多く、エネルギー源として利用するほか、生物体の細胞の原形質を形成する重要な物質

となるので、成人1日あたり50~80グラムの摂取が必要とされる。軽作業をおこなう成人の1日あたり必要なエネルギーは、約2500~3000キロカロリーである。しかし、どのような食物をどのようにしてとるかという問題は、古くからの各国の食習慣によってさまざまである。温暖肥沃な南ヨーロッパでは、農耕生活のなかでパン食が発達したが、牧草の採取、貯蔵に適した冷涼な北ヨーロッパでは、牧畜にもとづく肉類や乳製品の食用がひろまった。その後、民族や文化の交流によって両者の食習

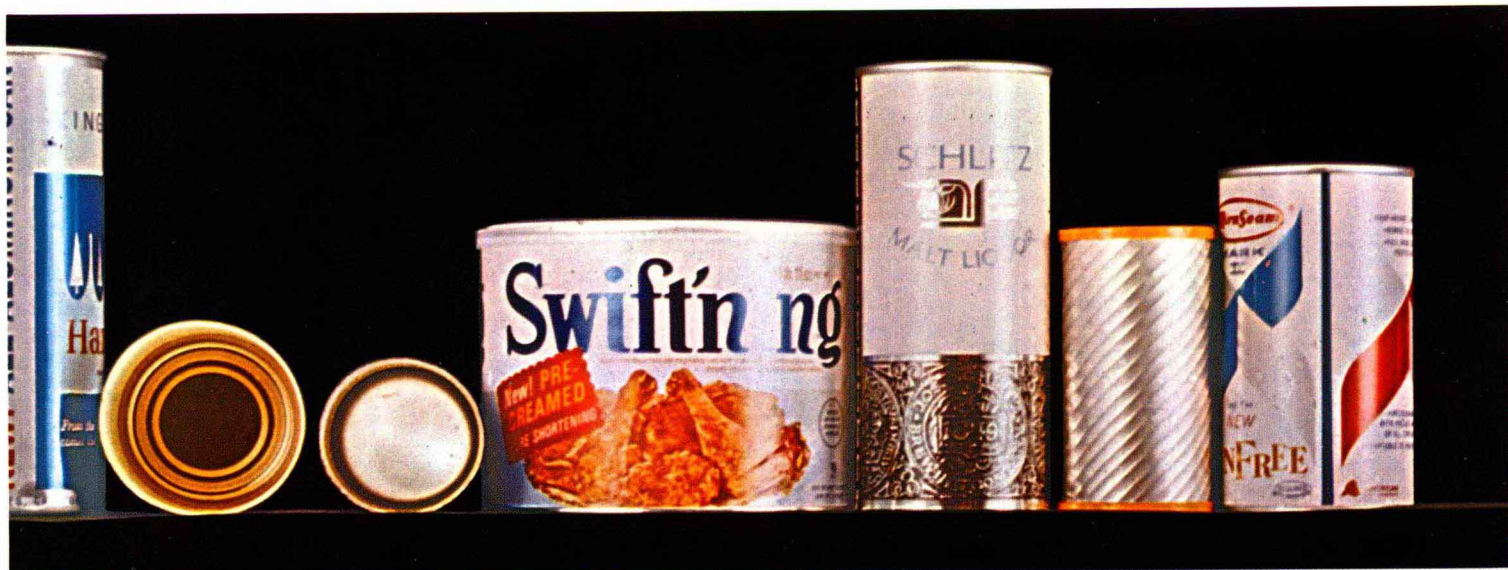
カロラマ



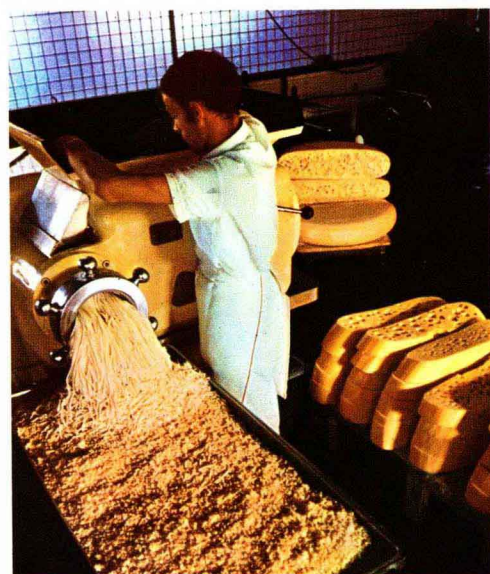
慣は融合され、パンと肉を主とする今日のヨーロッパの食習慣が形成された。中国では古くからアワやキビを主食とし、漢代になると、野菜、魚肉、獣肉などの副食が多様化し、宋代にいたって豚肉を基調とする中国料理が様式化されはじめた。いっぽう、高温多湿な東南アジアでは独特な米食主体の食習慣が発達し、豊富に香辛料を用いた獣肉料理もみられるが、一般に宗教的戒律がきびしく、ヒンドゥー教徒はウシ、イスラム教徒はブタを食べることを禁じている。しかし、このような食習慣は

主として上流階級のもので、一般庶民の食事は洋の東西を問わず、近年まで穀類や野菜などの植物性食品が主体となっていた。食物はその腐敗や変質を防ぐため、あるいは、食欲をそそり、消化吸収をよくするため、さまざまな加工法や、貯蔵法、保存法が発達した。前2000年ころのバビロニアでは、すでにコムギを粉にしパンをつくっていた形跡がある。チーズは古代の中央アジアで創作されてヨーロッパに伝わり、古代ローマ人はアルプス地方から輸入して賞味した。写真①は現代的なスイスチー

ズの加工作業、②はチーズの自動包装装置。穀類の加工法には、米やオオムギをついて白くする〈精白〉、コムギを粉にひく〈製粉〉、小麦粉からパンをつくる〈製パン〉、穀粉に各種の添加物を加えてつくる〈製菓〉、酒類を製造する〈醸造〉などがある。動物性食品の加工には、水分を除去して腐敗を防ぐ〈乾燥〉、ハムや塩ざけのように塩分を添加して細菌の繁殖をおさえる〈塩漬け〉、煙でいぶした〈燻製〉、ソーセージのような〈練製〉がある。今日もっとも一般的にみられる食物の貯蔵法は、かんや



10



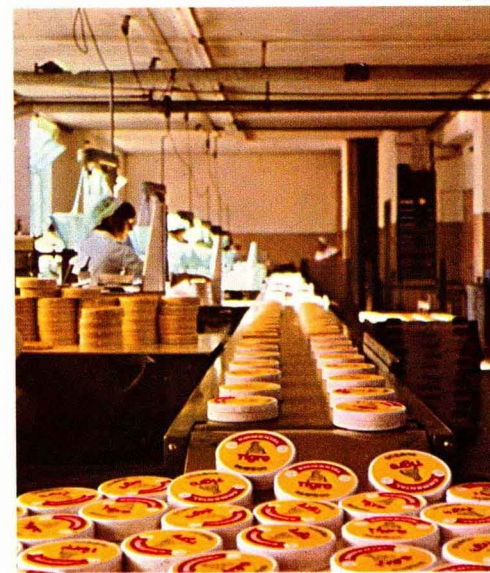
11



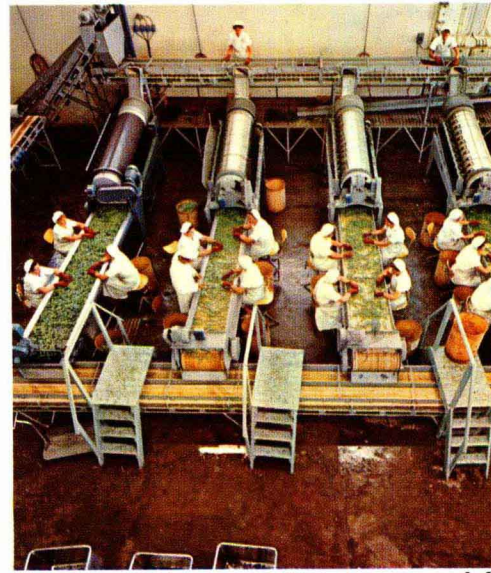
13



15



12



14



16

ガラスびんに食品をつめ、加熱殺菌して密封した〈かん詰〉や〈びん詰〉である(写真①②)。腐敗しやすい動物性食品を貯蔵するための冷凍は、食生活の多様化と冷凍施設の発達に支えられ、あらゆる生鮮食品や、多くの調理食品に普及されるようになった。写真③④は冷凍食品工場の一部。添加物を使わず、低温処理だけで十分な貯蔵がおこなえる冷凍食品は、味、香り、色、ビタミンなどをそこなわないというすぐれた性質をもっている。今日は冷凍食品の製造から、保管、輸送、販売にいたる一貫

した流通システムが完備し、コールド・チェーンと呼ばれている。写真⑤は従来の食料品店。⑥は近代設備をもつスーパーマーケット。化学工業の発達にともなって食品の包装器材にはさまざまなものが出現し、その衛生的な諸検査も厳重になった。写真⑦⑧は種々の食品包装器材。⑨は厳密な検査をうけるポリエチレン製のミルク容器。食品の製造や加工をおこなう食品工業は、最近、急速に機械化が進み、原料から加工、包装の過程にいたる一連の作業が自動的におこなわれるようになった。写

真⑩は全自動割別機。⑪は自動的なパスタ製造。しかし、食品工業が進歩するにつれて、着色剤、殺菌剤、防腐剤、人工甘味料など化学合成的な食品添加物の使用も増大し、人体に対する慢性毒性や発癌性がきわめて重要な問題として提起されるようになった。食物は人間の根本的な欲望に密着し、生命活動に不可欠なものであるため、さまざまなくふうがなされているが、宇宙飛行士用の宇宙食も、未来食品として注目されている。写真⑬⑭はアメリカ合衆国で用いられた宇宙食。

じょじし — [写真項目]

じょじしたい 徐氏体 中国の花鳥画の二大画法の1つ。五代の南唐の画家、徐熙(じょき)の画風をいい、水墨と淡彩で花鳥を写真的に描くもの。五代の黄筌(こうせん)の、華麗な色彩を用いて形態を細描する画風が、黄氏体として画院花鳥画の主流となったのに対して、風趣を重んじる徐氏体は、文人花鳥画の基礎となった。

ジョージタウン Georgetown 南アメリカ北東部、ガイアナの首都。人口10万(1970)。大西洋にそそぐデメラ川河口に、1781年にイギリス人によって建設された海港で、名称はジョージ3世にちなむ。後背地でサトウキビ、熱帯性果実、ボーキサイト、金、ダイヤモンドを産し、その輸出がさかん。工業は製糖、造船業がある。なお市は1966年のガイアナ独立にともない首都となった。

ジョージタウン George Town マレーシア、マライ半島西岸、ペナン島東岸にあるペナン州の州都。人口27万(1970)。通称ペナン。同国の主要港で、錫、ゴム、コブラなどの輸出港である。1786年、イギリス領となり、中継貿易港として発展、1957年、マラヤ連邦の一部となる。華僑やインド人が多く、東南アジアの典型的な複合都市。

ジョージにせい — 2世 Goerge II 1683~1760 イギリス国王およびハノーバー選挙侯(在位1727~60)。ジョージ1世の子で、父王にひきつづきホイッグ党のウ

オルボール、のち大ビットを登用した。オーストリア継承戦争で連合軍を指揮してフランス軍を破り、スペインやフランスの植民地の攻撃を試みたが、在位中にイギリスの議会制はさらに発展していった。大英博物館を創設。

しよしひゃっか 諸子百家 古代中国、戦国時代を中心に活躍した思想家、学派の総称。諸子とは多くの学者、百家とは多くの学派を意味し、弱体の周王朝下に勢力をのばした列国、諸侯に招かれた思想家たちが、その国情、学風、思想家の個性などに応じて種々の説を展開したことから生じた。司馬遷の「史記」によれば、孔子の門人たちの儒家、陰陽家、墨子らの墨家、公孫竜らの名家、韓非子らの法家、老子・莊子らの道家など六家であり、班固の「漢書」では、このほかに、蘇秦らの縦横家や農家、雑家、小説家をふくめ、九流十家に分類されている。なお、孔門の孟子については、一般に諸子には入れない。

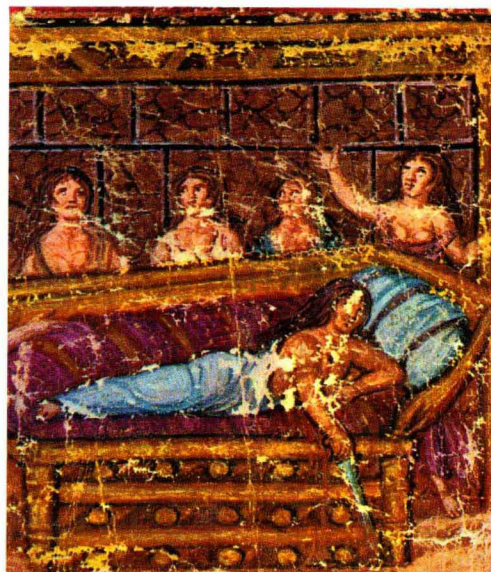
しよしよ 諸書 「旧約聖書」のヘブライ原典による分類。教訓書、その他をふくみ、多くは詩体。「ヨブ記」「詩編」「箴言」「伝道の書」「雅歌」「エレミヤの哀歌」「ダニエル書」「ルツ記」「歴代志上・下」「エステル記」など。

じょじょうかうしゅう 叙情歌謡集 イギリスの詩人ワーズワースとコールリジの共作詩集。1798年、ワーズワースの詩19編にコールリジの詩4編を加えて匿名で出版、1801年に増補再版がワーズワースの名で刊行された。バラードに範をとった簡潔な無韻詩で書かれ、ワーズワ

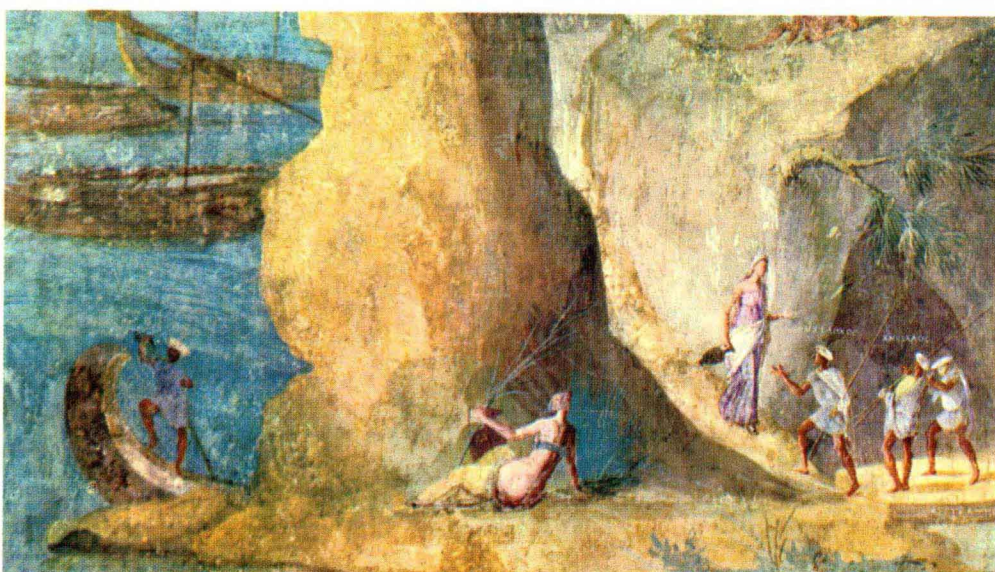
ースの「ティンターン修道院の数マイル上流で」、コールリジの「老水夫行」などの絶唱をおさめる。イギリス=ロマン主義詩の源泉とされ、再版の「序文」は有名。

じょじょうし 叙情詩 叙事詩、劇詩(戯曲)とならぶ詩の三大ジャンルの1つ。抒情詩とも書く。英語のリリックは、古代ギリシアでリラ(竖琴)の伴奏で歌われた詩に由来し、詩と音楽が未分化であった時代、また、事件の叙述とそれに対する情緒の表現のあいだに明確な差異が意識されなかった時代に起源をもつ。文学史的には、叙事詩の時代のをうけ、劇詩の前段階として生まれたもので、叙事詩が過去のできごとを客観的に叙述し、劇詩が未来の結末にむかう行動の展開を扱うのに対して、現在の状態を主観的に表現することの特徴とする。したがって詩人自身の感情の直接的な表出を重んじ、長さも他のジャンルの詩にくらべて短く、いくつかの連(スタンザ)や節(ストローフ)に分かれていることが多い。種類はきわめて多く、恋愛詩や悲歌(哀歌)のように純粋に個人の感情をうたったものから、哲学詩や道徳詩のように知的で思想的なものまであり、また、純粹詩、自然詩、宗教詩、象徴詩など、さまざまなジャンルに分類される。

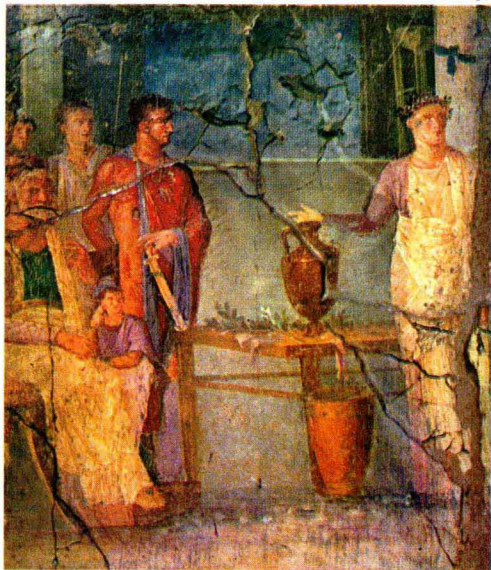
しよしじょうたん 処女降誕 イエス=キリストが聖霊によって母マリアの胎内に宿り、誕生したこと。〈使徒信条〉の一教理。「新約聖書」中の「マタイ伝」「ルカ伝」に、マリアが大工の夫ヨセフと婚約中に、大天使ガブリエルのお告げにより懐胎、出産したと記述されているも



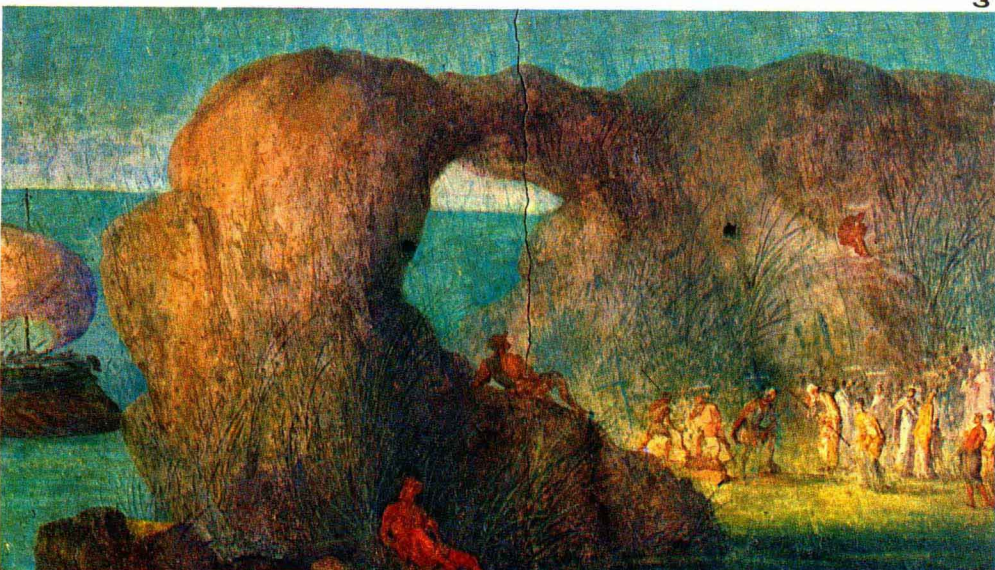
1



3



2



4

じょじし 叙事詩 叙情詩、劇詩とならぶ詩の三大ジャンルの1つ。神々や英雄を中心にした長編物語詩であり、物語詩の総称としても用いられる。最古のものは、前20世紀ころのバビロニアの「ギルガメシュ叙事詩」、古代エジプトのカデシュの戦いをうたった長詩、古代インドの二大国民叙事詩の「マハーバーラタ」と「ラーマヤナ」などがある。なかでも、ヨーロッパ文明の伝統の源流として、前800ころのギリシアのホメロスによる二大英雄叙事詩「イリアス」と「オデュッセイア」、前1

世紀ころのローマの国民叙事詩「アエネーイス」が名高い。「イリアス」はトロヤ戦争をうたったもので、ギリシアの英雄アキレスと敵の英雄ヘクトルとの戦いにはじまり、カッサンドラの予言どおりヘクトルの死とトロヤ陥落によって終わる(写真②)。「オデュッセイア」は、トロヤ戦争の10年後、ギリシアの英雄オデュッセウス(ユリシース)が、故国イタケへ帰る途中のさまざまな冒険を物語っている(写真③④)。「アエネーイス」は、ローマ最大の詩人ウェルギリウスの作で、トロヤの英雄ア

エネアスが、トロヤ陥落後に第2のトロヤ、すなわち、ローマ建国の天命をになつて諸国を歴遊する物語で、アエネアスとカルタゴの女王ディドーとの愛、アエネアスに見捨てられた女王の自殺(写真①)、さらに、イタリア上陸とローマ建設が物語られている。このほか、ケルト語で書かれたアイスランドの「エッダ」、フランス最古の叙事詩「ローランの歌」、ドイツの「ニーベルンゲンの歌」、スペインの「シッドの歌」、ロシアの「イェーゴリ軍記」、フィンランドの「カレワラ」などがある。

ので、カトリック教義上、「旧約聖書」中の「イザヤ書」におけるインマヌエルの預言が成就したとされる。これは、キリストの神性とともによりマリアの神性を示す根拠となり、被昇天と無原罪懐胎との信仰が生まれた。

ジョー・ニゾク —— 族 北アメリカのインディアン。スネーク川の流域に住み、採集狩猟生活をいとんでいた。現在はアリゾナ州の各保留地に住んでいる。

しよじょまく 処女膜 腔(ちう)前庭と腔との境をなす孔のあいたひだ。形も発達もきわめて多様である。形には半月状処女膜、環状処女膜、分葉状処女膜、篩(ふるい)状処女膜などがある。性交によって破れるが、それ以前にも、過激な運動や診察などで破れる場合もある。また、初回分娩で完全に破れて痕跡を残すだけとなる。なお、処女膜がまったく閉鎖されている場合(処女膜閉鎖症)では、初潮時に排出ができずに障害をおこすので切開手術をする必要がある。

ジョージ・よんせい —— 4世 George IV 1762～1830 イギリス国王およびハノーバー王(在位1820～30)。ジョージ3世の長男で、父の在位中、父王の対立党であるホイッグ党を支持した。父王の発狂により1811年から摂政となり、即位後はトーリー党を支持した。政治に対する無関心と不品行によって、世の非難をあびた。

ジョージ・ろくせい —— 6世 George VI 1895～1952

イギリス国王(在位1936～52)。ジョージ5世の次男。海軍士官として第1次世界大戦に従軍し、戦後、ケンブリッジ大学で学んだ。1923年、ストラスマア伯の娘エリザベス＝バウズ＝リヨンと結婚、長女エリザベス(のちのエリザベス2世)と次女マーガレットをもうけた。36年、兄エドワード8世のあとを継いで即位。

じょしん 女真 中国東北方面に居住したトゥングース系民族の10世紀以後の呼称。〈女直〉ともいう。隋、唐代には渤海領内に住み、靺鞨(まっかつ)といったが、10世紀に遼がおこるとその治下にはいつく女真(ジュセン)と呼ばれるようになった。12世紀に完顔(ワンヤン)部の首長阿骨打(アクダ)が金をたてて遼を滅ぼし、宋に対抗する一勢力となったが、1234年、モンゴル族に滅ぼされた。しかし、17世紀はじめ、ふたたび民族の統一に成功し、後金(こうきん)国を建設した。第2代の太宗は漢民族の忌む女真の名を満州と改め、国名も清とした。

じょうすうし 徐崇嗣 生没年不詳 中国、宋代初期(10世紀)の画家。徐熙の子といわれ、父の画風を継承して徐氏体の花鳥画を描いたが、水墨による輪郭線を描かず、形体を色彩だけで表現する没骨(もっこつ)画を創始。

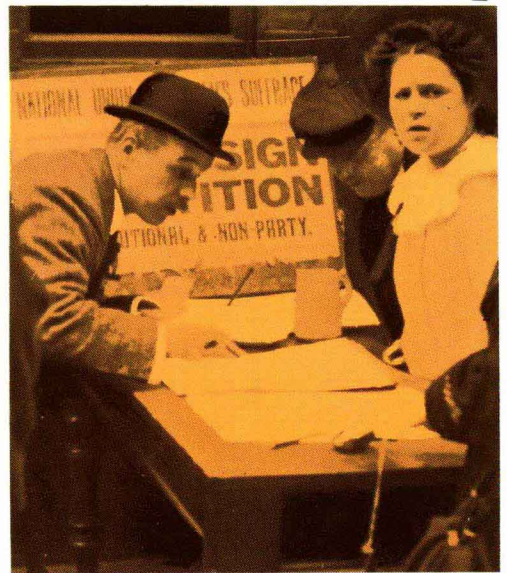
ショスタコービチ Dmitrii Dmitrievich Shostakovich 1906～75 ソビエト連邦の作曲家。ペトログラード音楽院に学び、19歳のとき交響曲第1番で世界的な評価をうけた。こののち交響曲第2番(1927)、歌劇「鼻」(30初演)

は退廃的として批判されたが、第2次世界大戦中、戦壕で書いた交響曲第7番「レニングラード」(42)は生涯の傑作として絶賛された。戦後48年にもふたたび共産党からその作風を批判されたが、党の政策に従う作品により名誉を回復、レーニン賞をはじめ多くの賞を受賞した。また作曲家としてははじめての「社会主義労働英雄」の称号をうけた。20世紀最大のソ連邦作曲家として、国際的にもきわめて高く評価され、15の交響曲をはじめ、100におよぶ作品を残している。

じょせい・かいほううんどう —— [写真項目]

しよせいきん 処世訓 処世上の教訓。古代エジプトにおいて一般化したもので、一種の知恵文学ともいえるべきもの。社会的な行為や政治、宗教、風習などについて述べている。おもなもので、カゲム2の処世訓、プタハ＝ヘテプの処世訓などがあり、これらは最古の世俗文学とされている。

じよせつ 如拙 生没年不詳 日本の室町時代の画僧。〈よせつ〉と読まれることもある。伝記は不明であるが、相国寺の禅僧で、中国の宋元画を取り入れて、日本の本格的な水墨画の始祖となった。有名な「瓢鮎(ひょうねん)図」(妙心寺、退蔵院蔵)は、時の足利將軍の座右の小屏風として描かれた禅機画である。ほかに「三教図」(両足院蔵)と「王右軍書扇図」が彼の作とされる以外に遺作はないが、その画系は周文、雪舟へと継がれた。



じょせい・かいほううんどう 女性解放運動 性にもとづくあらゆる差別の撤廃を求め、女性の地位や権利の向上をめざす運動。女性の平等を求める意識はアメリカ独立革命やフランス革命のなかで生まれた。しかし1789年、フランスで「女権宣言」を発表したオランブ＝ド＝グージュが、93年に反逆罪で処刑されるなど、初期の運動は悲惨な結果をともった。組織的な運動として展開された最初の婦人運動は、19世紀後半から20世紀初頭にイギリスとアメリカ合衆国におこった婦人参政権運動である。

イギリスの参政権運動は、バンクハースト夫人とその娘クリスタベル、シルビアらにひきいられた急進的な「婦人社会政治同盟」と、フォーセット夫人がひきいる穏健派の「婦人参政権同盟」の二大組織を中心に進められた。各方面へのデモ、請願、宣伝活動のほか、暴力や流血をともなう戦闘的な行動もとられた。婦人参政権の成立は、1918年イギリス、19年ドイツ、20年合衆国で実現したが、イタリア、フランス、日本などでは、第2次大戦世界後になってようやく実現した。女性解放運動は、

60年代後半から新しい局面をむかえた。いわゆる「ウーマン＝リブ」の運動がそで、まず合衆国でフリーダンの著書「女性の神秘」(63)をきっかけに火の手があがり、各国に少なからぬ影響をおよぼした。そのきわだった特徴は、法律上の男女同権の要求に加えて、人間としての女性の本質を見なおし、女性自身の意識改革を訴える点にある。写真①は「猫鼠法」(1913)に反対するプロパガンダ。②警官に連行される女性運動家、③請願書に署名を求める女性運動家。

しよせつと

ジョーゼット georgette (仏) 薄地のちりめんの一種。クレープ=ジョーゼットの略。がんらいは、経緯ともに強撚糸を用いた絹織物で、2本ずつ交互に配して織り、くしぼを出したもので、現在では、ナイロン、ポリエステルなど合成繊維を用いたものが多い。婦人服のほか、スカーフ、ベール、カーテンなどに利用。

ジョゼフィヌ ——— |写真項目|

じょそう 除草 農業または園芸上有害な雑草を駆除し、作物の生育や花壇などの美観をよくすること。生育中の雑草を除去するだけでなく、その種子の発芽を抑制する方法もふくめられる。従来は、草刈り、中耕、培土など機械的方法が主体を占めていたが、農業の進歩とともに、作物には無害で、雑草だけを枯死させる選択的効果をもった除草剤が開発され、ひろく使用されるようになった。しかし、除草剤の大量使用は、使用地域の生態系の破壊や、残留毒性など、重大な問題をかかえている。

ショーソン Ernest Chausson 1855~99 フランスの作曲家。パリ生まれ。法律を学んだのち、25歳でパリ音楽院にはいつてマスネー、フランクに師事、とくにフランクの強い感化を受けた。のちワーグナーに傾倒、典雅なフランス趣味とゲルマンの重厚さを備えた作曲家として頭角をあらわしたが、セーヌ河畔リムーを自転車で散策中、事故死した。歌劇、管弦楽曲、室内楽曲など、全38曲の作品があるが、とくに、バイオリンと管弦楽のた

めの「詩曲」(1898)、「リラの花咲くとき」をふくむ歌曲集「愛と海の詩」(82~92)、「隊商」(87)が有名。

しょたい 書体 文字の様式。古今東西にわたってさまざまな種類があり、ひとつの文字体系のなかでも、時代や個人の感覚、用途などに応じて、多様な変化を示す。たとえば、中国で発生した漢字には、殷の甲骨文を最古の書体として、周秦の篆(てん)書、漢魏の隸書、六朝以後の楷書などの正体のほか、後漢以後には草書、草書、行書などのくずした書体もあり、隋・唐になって楷、行両体が完成した。日本の仮名は、草書から創案された。

じょたつ 徐達 1332~85 中国、明朝初期の武将。濠(安徽省)の農民出身で、朱元璋に仕えて各地で勇名をほせ、1368年、元璋が洪武帝として即位すると征虜大將軍となり、元都を征服して元の勢力を掃討した。

ショータン Camille Chautemps 1885~1963 フランスの政治家。急進社会党から、1919年代議士となり、内相、法相を歴任したのち、30年から4度にわたって首相をつとめた。第2次世界大戦でベタン内閣の副首相として対ドイツ降伏をすすめた。その後アメリカ合衆国に移り、戦後47年、欠席裁判によって対ドイツ協力罪で有罪の判決を受けたが、54年に帰国した。

ジョーダン David Starr Jordan 1851~1931 アメリカ合衆国の動物学者。ニューヨーク州のゲーンズビル

生まれ。インディアナ、スタンフォードの各大学をはじめ、多くの大学や高校で教鞭をとる。おもに魚類の分類学に業績を残したほか、温度と脊椎骨の数との関係を示した「ジョーダンの法則」を発見した。また、学問研究以外に平和論者としても有名。

じょちゅうぎく 除虫菊 *Chrysanthemum cinerariaefolium* (学) 双子葉植物キク科の多年草。シロバナムシヨケギクともいう。ヨーロッパ南部、ダルマティアの原産。草丈は30~60センチ、葉は羽状に深く裂け、上のものほど小さい。初夏、茎頂に頭花をつける。花は中央が黄色、周縁が白色。花は殺虫成分ピレトリンをふくみ、蚊取線香、農用殺虫剤などの原料とされる。このほか、ベルシア原産のアカバナジョウギクもピレトリンをふくむが、含有率が低く、主として観賞用に栽培される。

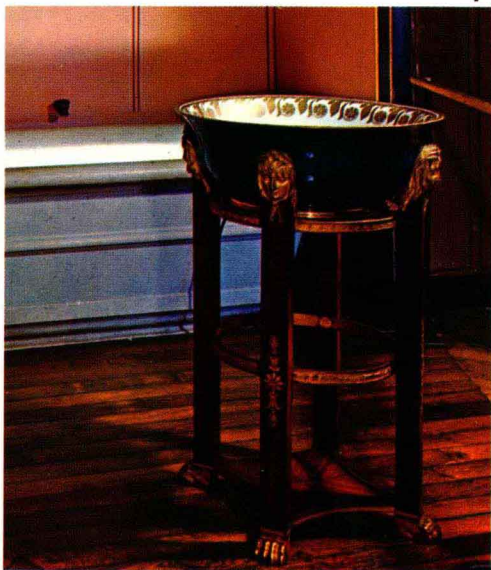
しょちょう 初潮 月経がはじめてあること。初潮年齢は人種、気候、栄養状態、性的刺激をふくむ環境の違いによっても差異を生じる。10歳以前にはじまるものを早発月経、21歳以後にあるものを晩発月経と呼び、いずれも病的とみなされるが最近では年齢が早まる傾向がある。

しょつかく ——— |写真項目| 次ページ。

しょつかく 触覚 生物が体表や粘膜の表面で機械的接触を感じる感覚。動物の体表や皮膚内には、触刺激を感受する触受容器と呼ばれる感覚器官がひろく分布してお



1



2



3

ジョゼフィヌ Joséphine de Beauharnais 1763~1814 ナポレオン1世の皇后。マルティニク島で軍人の娘として生まれ、16歳でボーアルネー子爵と結婚、2子をもうけた。フランス革命で夫は捕らえられ処刑されたが、彼女は助命された。美貌と才知に恵まれ、また洗練された物腰を身につけていたジョゼフィヌは、その後パリ社交界の花形となった。パリの有力者たちと懇意になり、総裁政府の立役者バスの愛人となった。1796年バスのすすめで当時無名の将軍であったナポレオン=

ボナパルトと結婚した。イタリア遠征中、ナポレオンは彼女に熱情あふれる恋文を送っているが、これらの手紙は、現在でも貴重な史料として保存されている。この間、彼女はパリでぜいたくくざんまいの生活を送り、貞淑な妻とはいえない軽薄な行動がめだつた。このため、エジプト遠征からもどったナポレオンは、一時離婚を考えたほどであったが、彼女は涙ながらに許しをうたうたので、離婚とはならなかった。99年、ナポレオンがブリュメール18日で知られるクーデターで政権をにぎり第1執政の

地位につくと、彼女は持ち前の幅広い交際を生かして各党派間の軋轢を除くという重要な役割をになった。1804年、ナポレオンが皇帝となったため、彼女は皇后の地位についた。しかし彼女がナポレオンの嫡子を生まなかったこともあって、8年に離婚された。以後マルメーゾンの館に住んだが、ナポレオンはその後もなにかと彼女の助言を求め、また彼女も助力を惜しまなかったといわれる。写真①ジョゼフィヌが使った刺繍台と椅子。②マルメーゾン邸内の浴室。③ナポレオンとジョゼフィヌ。

り、とくに、頭部、四肢端、付属肢などに多い。脊椎動物の触受容器には自由神経終末や触小体があり、水生の魚類や両生類では、体表に側線器官を備え、水流などの流動感とともに、接近する物体を媒質の圧変化などで察知する、遠隔触覚がみられる。触覚は、触受容器に圧力や牽引力などの刺激が与えられたときに感受され、刺激が持続的、または強力、または比較的深部に達する場合などは圧覚という。動物が圧覚を感じると、ヒドラやアルマジロにみられるような体の収縮や捲縮、昆虫によくみられる擬死、トカゲの自切など、さまざまな防衛的反応がおこり、ときには攻撃反応を示すものもある。弱い触刺激に対しては、方向性をもつ運動反応がみられることが多く、イトミミズが塊状に密集したり、ゴカイが管などにもぐりこむ性質や、鞭毛虫類が物体に接触すると反射的に逆もどりする反応など、下等な動物によくみられる。触覚は、動物が姿勢を維持するためにも重要な手段で、このことは、ネコやネズミの口ひげを切りとった場合の不安定な行動でよくわかる。人の皮膚に分布する触受容器の密度は、顔と腕に多く、とくに指先に発達しており、胴体や腿部には少ない。触覚は、長時間一定の刺激を与え続けると感覚が消滅して順応状態になる。植物にも触覚に対する反応がみられ、食虫植物やオジギソウなどはとくに有名である。

しよつき 食器 広義には、食物を調理し、食事をするためのすべての器具をさすが、一般には食卓で用いる容器・道具類をいう。食物や飲料の容器としては、皿、ボ

ール、カップ、壺、ポット、ジャーなどがあり、食物をつまんだりすくったりする道具に、フォーク、ナイフ、スプーン、箸(はし)などがある。素材は、陶磁のほか、金、銀、錫、鉄、ステンレス=スチールなどの金属、ガラス、木、竹、合成樹脂類、紙など多様である。食器は、大きさや形に器具としての機能性が求められるとともに、料理の味をひきたてるための心理的效果として、材質の触感、重量感、色彩なども重視され、その種類はきわめて多い。ヨーロッパでは食器の発達は比較的遅く、古代エジプト時代以来、16~17世紀にスプーン、フォークが普及するまで、大皿に盛った料理を、各自手づかみで食べる習慣がつづいたが、17世紀に、宮廷での食事のマナーが生まれてから、各人用の食器が出現、食器の種類は急増した。日本では、料理に合わせて食器が選ばれるため、その種類の豊かさは他に類がない。

しよつき 織機 織物を織る機械。経(たて)糸をたがいに一定の間隔を置いて平行に配列し、緯(よこ)糸を1本ずつ組み合わせる。経糸を巻いたビーム、ビームから出た糸を1本ずつ通すヘルド(そうこう)、糸の密度をきめるリード(おさ)によって経糸が配列され、ヘルドによって上下に分けられた経糸のあいだをシャトル(梭)が通って緯糸を入れる。緯糸が織物のほうへ押しこまれると経糸の上下が交代し、ふたたびシャトルが通るという経過で織物がつくられていく。織機には人力による手織機と、動力を用いた力織機がある。力織機は1785年にイギリスのカートライトが発明したといわれ、産業革命の

にない手として重要な役割を果たした。

ジョッキ jug (英) おもにビールを飲むための、取手のついた容器。ガラス、陶器、象牙、銀、ピュータ(錫と鉛の合金)などでつくられ、マグと呼ばれる小形のものから飲みまわし用の巨大なものまで、形もふた付きや長靴形など多彩である。

ショック shock (英) 一般に、肉体的(物理的)、精神的な衝撃をさすが、狭義には医学用語として、急性の末梢循環の不全をいう。いいかえれば、循環血液量が、血管系の容量にくらべていちじるしく減少する状態、ならびに、血液が小血管にたまってしまい、逆に大血管の血液が喪失するものをさす。前者では大出血、はげしい嘔吐や下痢、日射病などにあらわれ、後者は感染症や過敏症のさいにみられる。また、老人性のものも少なくない。血色が悪くなり、血圧低下や徐脈、意識障害などの症状がある。治療には原因療法とともに、保温につとめ、カンフル注射などをおこなう。放置して、症状が進行すると致命的である。

ショックリー William Bradford Shockley 1910~アメリカ合衆国の物理学者。イギリスで生まれたが、のち移住。半導体の研究で有名。ゲルマニウムp-n接合の電子論的研究からp-n接合型トランジスターを発明し、トランジスター工業の基礎を築いた。1956年、ノーベル物理学賞を受賞。



1



2



3

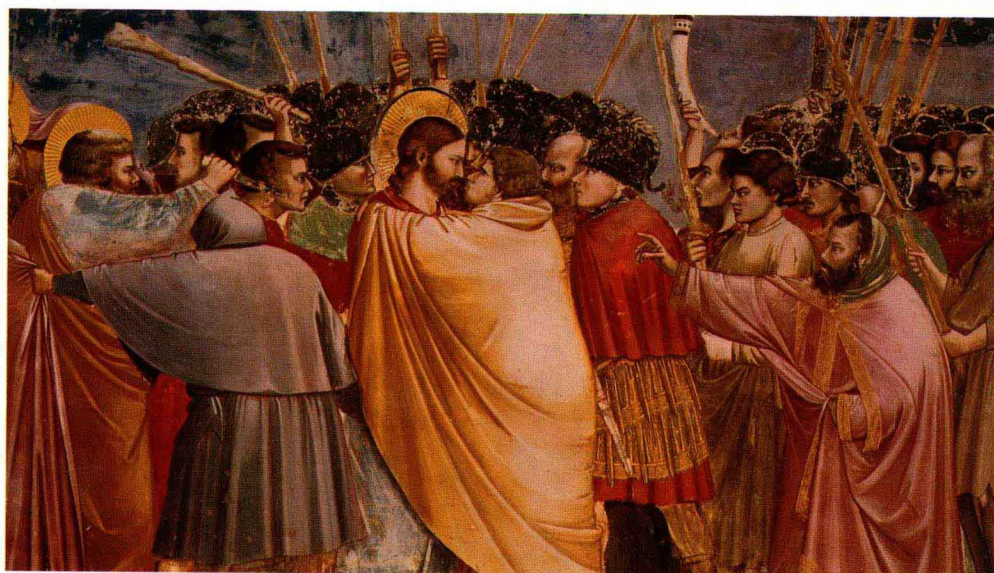
しよつかく 触角 節足動物の頭部にある付属肢で、重要な感覚器官。ただし、節足動物でも、カブトガニなどの剣尾類、クモやサソリなどのクモ形類では触角をもたず、これらの仲間を無角類と総称することもある。甲殻類の触角は、ふつう、前方にある第1触角と後方にある第2触角との2対からなる。第1触角は比較的小さく、触覚と臭覚を感受する感覚毛が生えている場合が多く、エビやカニなどでは基部に平衡器官を備えている。第2触角は大きく、軟甲類では基部にこの類特有の排出器

官である触角腺が開く。ミジンコなどの下等な甲殻類や幼生などでは第2触角が運動器官の役割を果たすこともある。昆虫類の触角の形はさまざまであるが、基本的には、柄節と呼ばれる大形の第1節と、梗節と呼ばれる短い第2節があり、その先の第3節以下は同様な節がいくつも連続し、鞭節と呼ばれている。感覚器官としては鞭節が重要で、表面に多くの小孔があり、その奥に感覚細胞を備え、神経系につながっている。なかには、第2節にジョンストン器官というものがあって、気流、風圧、

振動などの機械的刺激を受容する種類もある。昆虫の触角の形には、トンボの鞭状、シロアリの珠数状、ハラアカヒトリの鋸歯状、シンジュサンの櫛状、ヤママユの羽毛状(写真②)、チョウの球桿状(写真①)、コガネムシの鯉葉状など多くの種類がある。カミキリムシ(写真③)の仲間には、体長の3倍以上もある長い触角をもつものもある。カタツムリやモノアラガイなどの軟体動物にみられる、体の前端にある突起も触角と呼ぶことがある。



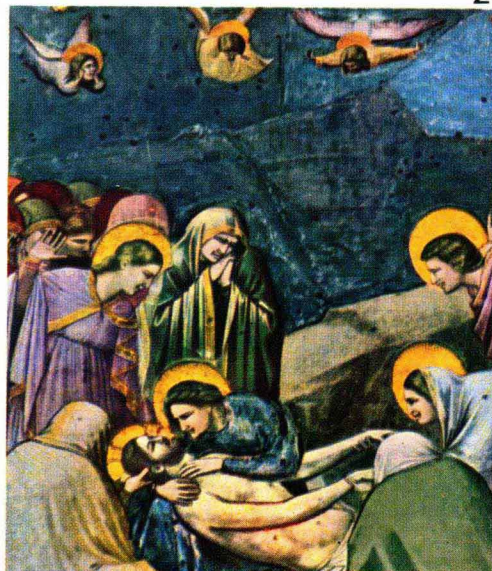
1



4



2



3



5

ジョット Giotto di Bondone 1266/7～1337 イタリアの画家。中世のビザンティン主義を超越して、イタリア＝ルネサンス絵画の祖となった、美術史上きわめて重要な芸術家である。フィレンツェに近いコレ＝ディ＝バスビニャーノで生まれたといわれ、少年時代、写生中に、フィレンツェ派をひらいたチマブーエに見いだされてその門弟になったという伝説が知られているが、ジョットの理知的な画面構成と深みのある心理的表現には、ビザンティン絵画様式を残すチマブーエの影響はほとん

ど認められない。彼の初期の作品として、アシジのサン＝フランチェスコ教会上院のフレスコ画、「聖フランチェスコ伝」の28の連作が考えられる(写真②は、連作のうち「説教する聖者」)。これらの無銘の作品の様式が、彼のその後のものとはかなり異なっているために、この連作をジョットの作とする説には否定的な意見も根強いが、「小鳥に説法する聖フランチェスコ」、「アレツォからの悪魔追放」(写真③部分)などの数場面は、ほぼ確実に彼の手になるものとされ、フランシスコ会総長ジョバン

ニ＝ディ＝ムーロが1296年ころに制作の依頼をしていることから、これらの作品は97年ころ描かれたと思われる。教義の図解にとどまっていたそれまでのキリスト教絵画を脱却し、慈愛に満ちたフランチェスコの行動を新しい表現法であらわしたこれらの作品の意義は大きい。1300年ころ、彼はローマに招かれて、聖年記念事業の一環として注文された仕事、旧サン＝ピエトロ聖堂のモザイク画「ノビチエラ」をはじめ、サン＝ジョバンニ＝ラテラノ聖堂の壁画などを制作したが、ほぼ全面的に修復され



6



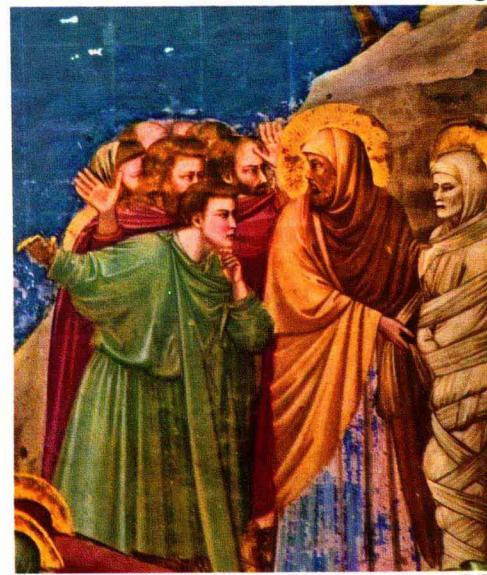
8



7



9



10

ているため、とくに後者に関しては推定の域を出ない。また、この時期の作品として、フィレンツェのサンタ・マリア・ノヴァ聖堂の『磔刑』などが考えられているが、彼の確立された芸術様式を明確にあらわしているのが、バドバのスクロベニ礼拝堂の壁画である。この礼拝堂は3年に起工、5年に献堂されており、壁画の制作年も5〜6年ごろとみられる。彼はこの新しい礼拝堂の西壁全体に『最後の審判』を、他の3面には『聖アンナと聖ヨアキムの出会い』(写真⑤)。⑧は『キリスト降誕』。

①『エジプトへの逃避』。②『ユダの接吻』。③『我に触れるな』から聖母の生涯(写真⑥は『聖告』)、キリストの生涯(写真⑩『ラザロの蘇生』、⑪『キリストの死に対する嘆き』)、『聖霊降臨』までの38場面を3層に分けて描き、さらにその下の第4層には美徳と悪徳の擬人像を描いている。彼は、複雑な建築構造に画面を従属させる中世的な手法を捨てて、各場面とも四角い空間のなかに絵画として独立させ、また、理知的に計算された簡潔な構図は、素朴な人物像とあいまって、画題をドラマティック

に語りかける効果を高めている。これらの作品のなかで、技巧的には未完成ながらも、すでに遠近法を用いていることは注目される。フィレンツェのサンタ・クロチエ教会のバルディ礼拝堂の壁画『聖フランチェスコ伝』やベルツィ礼拝堂の『洗礼者ヨハネ伝』など、10年代以降の作品では、人物の感情表現は抑制されているが、彼の名声はすでに高く、ダンテの『神曲』にも記されているが、その真価が正しく認められたのは、ルネサンス以後である。

しよつくり

ショックりょうほう —— 療法 精神障害の治療法のひとつ。トランキライザーの効能が認識される以前には、ひろく用いられた。インシュリン＝ショック療法もそのひとつで、高単位のインシュリンを投与し、患者の血糖量を減じて昏睡状態に数十分おいたのち、覚醒させる方法。精神分裂病の初期には奏効する。また、電気ショック療法は、頭部の両側に交流電流を通して意識を失わせるとともに、けいれん発作をおこさせて中枢神経系の平衡を回復させる方法。とくに躁鬱病患者に利用される。

ジョッティーノ Giottino 生没年不詳 14世紀中ごろのイタリアの画家。本名はジョット＝ディ＝マエストロ＝ステファノとする説が強い。彼の伝記、作品は不詳であるが、1369年に、バティカン宮殿でジョバンニ＝ダ＝ミラノ、ガッディ父子と共同制作したといわれる。

ショット shot (英) 映画用語。特定のカメラ位置から中断なく撮影された一連のフィルム、またはその画面。カットともいう。映画を構成する最小の単位で、これが集まってシーンとなり、シーンが接続されてシーケンスが形づくられ、シーケンスの配列によって作品が構成される。瞬間的なものから長時間におよぶものまであるが、連続している限り、ワン＝ショットと呼ばれる。

ジョット —— [写真項目](#) 前々ページ。

ショットキー Walter Hans Schottky 1886～ ド

イツの物理学者。スイス生まれ。父親のフリードリヒは関数理論で有名な数学者。真空中や固体内の電子やイオンの運動を研究し、1915年、熱電子管などで電子電流を得る場合、陽極の正電圧を十分増加すると電流が完全に飽和しないのでさらにゆっくりと増えつづける〈ショットキー効果〉と呼ばれる現象を発見した。また、熱力学、電気音響学の研究もおこなった。

ジョッフル Joseph Jacques Césaire Joffre 1852～1931 フランスの将軍。1871年、バリのエコール＝ポリテクニク在学中にプロイセン＝フランス戦争に加わり、同校卒業後、76年に工兵隊大尉となる。85年から台湾、ハノイ、マダガスカルなど各地に勤務し、96年に帰国してのち少将となり、1910年に軍事参議官、翌11年、参謀総長となる。第1次世界大戦での対ドイツ戦では、フランス軍最高司令官として〈作戦計画第17号〉を立案、マルヌの戦いで勝利をおさめたが、シャンパーニュ大攻撃、ソンムの戦いなどに失敗して16年に辞任、元帥となった。

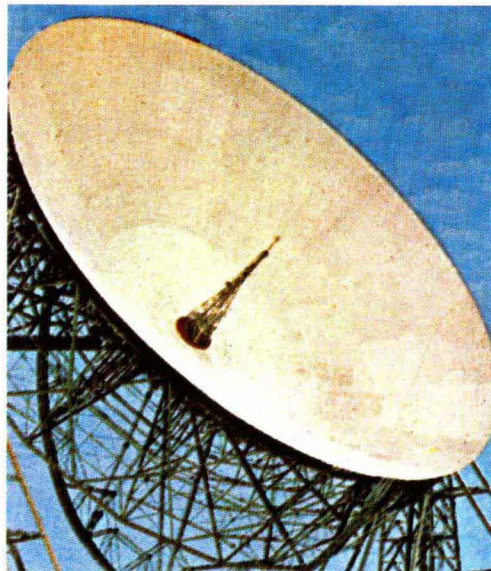
じょていけい 徐禎卿 1479～1511 中国、明代の詩人。蘇州の人。前七子の1人として知られる。少年時代には、同郷の祝允明、唐寅、文徵明とともに〈呉中の四才子〉と呼ばれ、1505年に進士となって都に出てからは、李夢陽、何景明と交わって〈三雄〉と称された。国子博士に死去。著書には、自選集「迪(てき)功集」6巻、詩論「談芸録」1巻のほか、外集および別稿五集があり、叙情的な七言絶句にとくにすぐれる。

ジョデル Etienne Jodelle 1532～73 フランスの劇作家。1552年、アンリ2世の宮廷で自作の悲劇「因われのクレオパトラ」を素人劇団で上演、みずからもクレオパトラを演じて大成功をおさめ、ブルゴーニュ座進出のきっかけをつくった。さらに、悲劇「ディドン」(58)などを発表し、ブレヤード詩派の名を高めたが、祝賀会の仮装がもとで異端の疑いをうけ、貧窮のうちに没した。とくに「因われのクレオパトラ」は、フランス最初の古典悲劇として知られ、ラシヌなどに大きな影響を与えた。

しよとう 初唐 中国、唐王朝の創始者、高祖李淵(在位618～626)から、6代玄宗(在位712～756)の治世初期までの約100年間の時代をいう。10世紀初頭までつづいた大規模な統一国家、唐の建設期にあたる時代で、領土は、朝鮮、インドシナ半島、中央アジアまでひろがり、貨幣経済がおおいに発達した。初唐後期には、則天武后による恐怖政治がおこったが、玄宗によっておさえられ、文化面では、南北朝の文化が融合して、盛唐における文化、とくに文学興隆の基礎を築いた。

しよとう 蔗糖 無色の結晶で、化学式はC₁₂H₂₂O₁₁。砂糖の化学名でサッカロースともいう。二糖類のひとつで、水によくとけ、水溶液は甘味をもつ。天然の植物体にひろくふくまれ、サトウキビ、サトウダイコン、サトウカエデなどから製造する。甘味料として利用。

しよとうしけつ 初唐四傑 中国、唐代初期(7世紀後



1



2



3

ジョドレルバンクてんもんだい —— 天文台 イギリス、イングランド北部のマンチェスター市郊外の近くにあるマンチェスター大学付属の天文台。天体電波観測を主としているが、1957年に9年がかりで完成した移動パラボラ(放物面)型電波望遠鏡は、口径76.2メートルの規模を誇る(写真②)。この望遠鏡は、何枚ものパラボラ型の金属面が組み合わされ、扇形に区切られた各面は観測すべき天体にむかってそれぞれ照準が定められるような構造になっている。天体からとどく放射線は、パラボラ

のくぼみに反射して、頂点から20メートルのところにあるパラボラ中心部のアンテナに集められる。アンテナに受信された電波は、ただちに記録計によって分析、記録される。また、パラボラの移動や傾斜は、直径96メートルの円軌道を動く。そして、観測に必要な調節や制御の大部分がコンピューターにより操作されている。この望遠鏡のほかに、補助的機能をもつ38×25メートルの矩形パラボラ型電波望遠鏡が2台ある(写真③)。この天文台では、太陽電波、電波星(オリオンなど銀河系のガス星

雲、アンドロメダなどの銀河系外星雲、かに星雲などの超新星の残骸)の観測で多くの業績をあげている。いっぽう、ソビエト連邦に近い位置にあるため、ソ連邦が打ち上げる人工衛星を、再三にわたってソ連邦の発表よりも先取りして世界に追跡報告するので知られている。電波望遠鏡とは、赤道儀式、経緯儀式取付台にアンテナをつけ、天体からの電波を集めるための望遠鏡で、惑星のレーダー観測、宇宙中継、人工天体のレーダー観測などに使うものもふくまれる。

半)に活躍した王勃、楊炯(ようけい)、盧照鄰(ろしょうりん)、駱賓王(らくひんのう)の4人の詩人をいう。いずれも下級士族出身であり、幼時から煥発な詩才を示しながらも、従来の詩人のように宮廷詩人に属さず、また、楊炯1人を除いて、数奇な運命をたどった点で共通する。彼らは、六朝末から唐初にかけて詩壇を支配した齊梁(せいりょう)と呼ばれる詩風に対して、いっぽうではその余風を残しながらも、これまでにない自由な発想や新鮮な表現を用いて、詩壇に新風を鼓吹した。なかでも盧照鄰、駱賓王の2人は、唐代七言歌行詩の開拓者として名高い。作品では、王勃の「滕(とう)王閣序」、駱賓王の「帝京篇」、盧照鄰の「長安古意」が代表的。

しょとくぜい 所得税 広義には個人、法人の所得に対し課せられる税をさし、個人所得税、法人税、個人・法人の住民税などをふくむ。日本の現行税制上は、ふつう国税として個人の所得に課せられる所得税をいう。租税体系の中核をなし、累進課税などにより税収の弾力性をもつと同時に、景気安定の機能も果たす。毎年一定時期に前年分につき確定申告を最終手続きとし、それに先行してその年の所得税額を2回に分割し予定納税する。給与、退職所得などは、源泉徴収だけでも場合が多い。

ショートニング shortening (英) 硬化油や動植物油脂を原料として、これに空気、二酸化炭素、窒素などのガス(10～20パーセント)を混入させた半固形の油脂食品。ショートニングオイルともいい、もともとロードのかわ

りになるものとして製造された。原料としては、大豆油、やし油、牛脂、鯨硬化油などがある。製菓、製パンに用いられ、炭水化物やたんぱく質が塊になるのを防いで、もろくて砕けやすい性質を与える。また、フライなどの料理に用いられるものもある。

ジョドプル Jodhpur インド北西部、ラージャスターン州中部の都市。人口31万8900(1971)。鉄道、道路、航空路の要地で、穀物、綿花の集散地。織物、製菓、金属加工などの工業や手工芸品の製造がさかん。1459年にラオ＝ジョード土侯国の首都として建設され、1949年にラージャスターン州に加えられた。

ショートホーンしゅ 一種 ウシの1品種。イギリス原産の肉用種で、18世紀後半にコリング兄弟が創成した。体重は雄が1～1.3トン、雌が0.8トン内外に達する大形種で、体形は長方形、頭や四肢が小さい。体色は白地に赤褐色の毛がまじるもの、赤褐色の地に白斑のあるものなどがある。短期間で太りやすいが、病気にかかりやすく、脂肪こぶがでやすい欠点がある。乳肉兼用に改良したものに乳用ショートホーン種がある。

ジョドレルバンクてんもんだい [写真項目](#) | [前ページ](#)

しよにゅう 初乳 妊娠2～4か月ころから乳腺が発達しはじめ、それにとまって自然に分泌、あるいは強圧したときに分泌される白黄色の液体。出産後約3～4日

まで分泌される。初乳はたんぱく質、塩類を多くふくむので、新生児はこれを飲むことによって胎便の排出ができる。こののちは成乳に移行する。栄養価は成乳のほぼ2倍。

じょにんけんとうそう ⇨ [にんしよくけんとうそう](#)

ショーバン Nicolás Chauvin 生没年不詳 ナポレオン軍の兵士。熱烈な愛国者であったため、彼の名から、排外主義を意味する〈ショービニズム〉という言葉が生まれた。

ショパン [写真項目](#)

ジョバンニ José Giovanni 1923～ フランスの小説家、映画監督。第2次世界大戦後暗黒街に身を投じ、逮捕、脱獄をくりかえしたのちに、その体験を著わして流行作家となった。「穴」(1959)など多くはフィルム＝ノワールとして映画化され、また監督としても親友のドロンと組んで「暗黒街のふたり」(73)、「ル＝ジタン」(74)、「ブーメランのように」(76)など話題作をつくっている。

ジョバンニ (モンテコルピノの) **Giovanni** 1247～1328 イタリアの修道士。1272年にフランシスコ会にはいり、のち、教皇ニコラウス4世の命により、ペルシアなど東方諸国で布教にあたった。94年、北京に派遣され、1307年、同地で最初の司教に任ぜられた。



1



2



3

ショパン Frédéric François Chopin 1810～49 ポーランドの作曲家、ピアニスト。写真●H. シェッフェル画「ショパン像」。ワルシャワ近郊ゼラゾフ＝ウォーラ村生まれ。父は陸軍学校の語学教師をつとめるフランス人、母は零落したポーランド貴族の娘で、その長男。4歳のときから母と姉にピアノを習いはじめ、6歳のときジウニーのもとで本格的に修業を積み、早くも異常な楽才を示し、〈ポーランドのモーツァルト〉と呼ばれた。1822年、ワルシャワ音楽院長エルスナーに師事して和声法、

対位法を学び、作曲家になることを決意するとともに、国内各地を旅行して、民俗音楽から深い示唆をうけた。27年、音楽院に入学、29年に全課程を終了し、同年夏にワルシャワで最初の公開演奏会を開いて大成功をおさめたが、このころから国外で活動する決心をした。30年11月、ワルシャワを出発、まずウィーンで好評をうけ、ついでシュトゥットガルトに立ち寄ったが、ここで、大きな期待をいだいていたポーランド革命が失敗したことを知り、深い絶望を味わった。有名な「革命のエチュード」

は、このときの作品である。31年9月、パリに到着(写真●はショパンがパリで最初の居を構えた魚商通り)。リスト、ヒラーなどと親交を結ぶとともに、自由な社会の空気にふれ、人間的にも大きく成長した。32年、パリで最初の演奏会を開いて名声を高め、さらに貴族の家庭教師をつとめて生活の安定をはかり、作曲家、ピアニストとしてめざましい活躍がはじまった。35年、帰国して両親に再会、その帰途、ドレスデンで旧友の妹マリア＝ウオジンスカに会って熱烈な恋におちいったが、ショパンの結

ジョバンニダボローニャ → [写真項目] 次ページ。

ジョバンニダミラノ Giovanni da Mirano 生没年不詳 14世紀後半に活躍したイタリアの画家。フィレンツェでT. ガッディに師事し、サンタ・クロチェ聖堂にフレスコ画を制作した。力強い筆致でフィレンツェの盛期ゴシックの発展に寄与した。ほかに、「ピエタ」(65 フィレンツェ、アカデミア美術館蔵)も彼の作といわれる。

ジョバンニダルマタ Giovanni Dalmata 1440?～1509? イタリアの彫刻家、建築家。ダルマティア地方の出身で、1460年ころからローマに出て、フィエゾレとともに、聖マルコ寺院の祭壇の彫刻装飾などを制作。その後、ハンガリー、ベネツィアにおもむいて作品を残している。

ジョバンニディパオロ Giovanni di Paolo 1399?～1482 イタリアの画家。シエナに生まれ、同地でシエナ派として活躍した。ジェンティーレ・ダ・ファブリアーノ、サセッタの影響のもとに、禁欲的な精神性と詩情をたたえた、独特の画風を示した。「最後の審判」「磔刑図」(1440 とともにシエナ絵画館蔵)などが知られる。

じょひこう 徐悲鴻 1894～1953 中国の画家。1919～23年、パリ美術学校に学び、国民美術協会などで展覧会を開く。その後、ヨーロッパ各地を遊学して27年に帰国。翌年、北京国立芸術学院の院長となり、以後、教育者と

して要職を歴任、革命後の49年からは中央美術学院院長となり、社会主義リアリズムの確立に貢献した。彼自身は、30年代から、反帝国主義的な作品を発表して、34年に訪れたソビエト連邦で、レービンら移動派の影響を受けている。ヨーロッパの近代絵画とともに、「驢図」(30)などの筆墨による伝統的な中国絵画も残した。

ショービスム chauvinisme (仏) 自国の利益のみを主張する極端な国家主義。とくに、軍事的見地における狂信的な愛国感情をさす。ジンゴイズムと同義の政治用語で、偏狂的愛国主義、盲目的愛国主義、排外的愛国主義さらには好戦的愛国主義と訳されている。語は、フランス革命のさいの第一共和政およびナポレオン1世の第一帝政時代に、皇帝を神のごとく崇拜した熱狂的愛国兵士ニコラ＝ショーバンに由来する。

ジョーベル Maurice Jaubert 1900～40 フランスの作曲家。ニース音楽院卒業後、パテ＝シネマ会社の音楽監督となり、約20本の映画に作曲、映画音楽史上に不滅の名を残した。第2次世界大戦中、対ドイツ戦で戦死。代表作「巴里祭」(1932)、「舞踏会の手帖」(37)、「北ホテル」(38)、「旅路の果て」(39)。純音楽の作品も多数ある。

ジョーベルティ Vincenzo Gioberti 1801～52 イタリアの哲学者、神学者、政治家。1825年、司祭となり、のち政界にはいる。48～49年にサルデーニャ首相となり、ついで駐フランス大使をつとめた。その後、政界をシリ

ぞいて哲学、神学の研究をおこなった。哲学者としてのジョーベルティは、神学的實在論の立場にあったが、方法として弁証法に依拠したため、〈イタリアのヘーゲル〉と呼ばれた。主著「哲学研究序説」(39～40)、「善論」(42)、「イタリア人の精神的政治的優位」(43)など。

ショーペンハウアー Arthur Schopenhauer 1788～1860 ドイツの哲学者。ダンチヒの裕福な家庭に生まれ、1809年からゲッティンゲン大学で医学、哲学を、11年からベルリン大学でギリシア古典を学ぶ。13年、論文「充足根拠律の四根について」で哲学博士号を得る。彼はフィヒテ、シェリング、ヘーゲルの楽天主義的な観念論に批判的立場をとり、20年、ベルリン大学講師となったが、当時、哲学界はヘーゲルの支配するところであったため、彼にとってヘーゲル哲学は巨大な障壁となっていた。まもなく教職を辞し、以後を在野の学者として送った。彼は、カントの認識論、プラトンのイデア論、「ベーダ」の汎神論、および主意説と厭世観の結合を基調とした哲学を展開した。19年に労作「意志と表象としての世界」第1巻を発表したが、51年の哲学的随想集「パレルガ＝ウント＝バラリボメーナ(付録と補遺)」によって、ようやく哲学者としての位置を得ることができた。彼は同書で、意識の根底に〈生きようとする意志〉が存在するとし、人間の本质は意志にあるとした。ほかに主著「自然における意志について」(36)、「意志の自由」(39)など。

しよほうせん 処方箋 医師が治療に用いる薬剤の調合

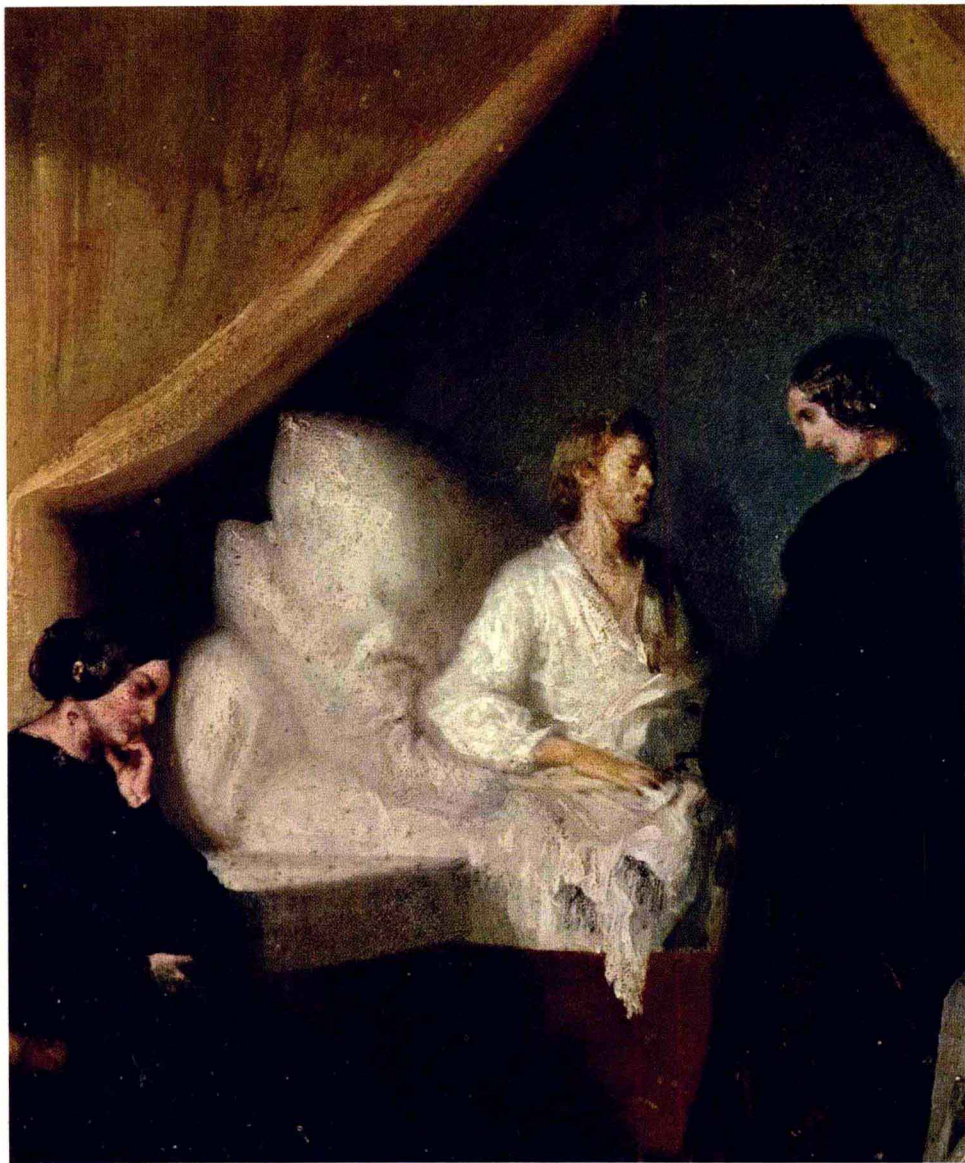


4



5

核の身を危ぶんだ周囲の反対にあつて挫折、苦悩のどん底に突き落とされた。36年、リストの紹介で女流小説家サンドと知り合い、以後、約9年間にわたる2人の生活がはじまる。写真④サンドの戯画。ショバンより6歳ほど年上の彼女は、病身の彼を母性的な愛情をもって世話し、パリからマジョルカ島、ノアンへと転地をくりかえしながら、その創作活動を助けた。この間、前奏曲、スケルツォ、ポロネーズ、マズルカなどの名曲が多数生まれており、生涯におけるもっとも旺盛な創作力を示している。しかし、46年秋には不和が原因で離別、48年に念願のロンドンを訪れ(写真⑤ロンドンの社交界)、ついでスコットランドを旅行したが、過労から病状が悪化、同年11月、パリにもどったのちは病床に臥し、49年10月、数少ない友人に見守られてその生涯を閉じた。写真⑥ニートフスキー画「臨終のショバン」。その遺体には、彼がワルシャワをたつときに贈られた故国の土がかけられ(写真⑦若き日のショバンが散策したオイエクフ城付近)、その心臓はワルシャワの聖十字架教会に送られた。



6

彼の作品は、歌曲から室内楽まで多岐にわたるが、もっとも重要なものは200曲をこえるピアノ曲で、前奏曲、練習曲、バラード、夜想曲、即興曲、円舞曲、ポロネーズ、マズルカなどから協奏曲まで、〈ピアノの詩人〉の名にふさわしく、いずれも比類なく高雅な詩情にあふれている。とくに、故国ポーランドに寄せる愛国的熱情は、その作品に特異な精彩をそえており、その繊細な叙情性と高貴な詩的想念とともに、真のロマン主義精神の発揚として、聴く者に深い感動を与える。